宮城県文化財調査報告書第38集

宮　前　遺　跡

―亘理町における古代集落跡の発掘調査概要―

昭和50年3月

宮　城　県　教　育　委　員　会

序

最近，とみに文化財に対する関心が高まり，祖先が残した文化財や歴史資料を再認識し，後世にも伝えようとする気運が次第に浸透してまいりましたことは，まことに喜ばしい限りであります。県内の埋蔵文化財包蔵地の数も，現在では3,000か所以上を数え，調査がすすむにつれて，その数は年々増大しております。このような埋蔵文化財は，われわれの祖先が自然の恵みをうけ，あるいは厳しい自然と戦いながら，数万年，数千年の昔から今日まで築いてきた歴史を知る上でかけがえのない文化的遺産であります。したがって，現代に生きるわれわれは，このような文化的遺産から多くを学ぶとともに，未来へと伝える義務をもっています。　しかし，近年の経済成長に伴う開発は，その件数の増加とともに，土木機械の大型化，開発面積の増大化によって急速に進展し，破壊される遺跡が増大してまいりました。遺跡は極力保存されるべきですが，諸般の事情から保存が困難な場合には，発掘調査を実施し，記録として保存する措置をとってまいりました。この宮前遺跡も，宅地開発に伴ない，記録保存のため国庫補助事業として、約6ヶ月間に及ぶ発掘調査を実施したものであります。お陰様でこの調査の結果4世紀の古墳時代前期より9世紀の平安時代にまで及ぶ56軒の竪穴住居跡群が発見され，古代の集落のあり方や，竪穴住居の変遷をたどる上で貴重な資料を得ることができました。

なお，発掘調査に際して，地元亘理町および亘理町教育委員会，亘理高等学校，吉田小学校の関係者，直接発掘調査に協力いただいた遺跡発掘調査協力員の先生方，補助員の学生諸君，地区民の方々の御協力に対し，調査概報の刊行に当り，深く感謝の意を表する次第であります。

最後に，この調査報告書が，宮前遺跡の理解と今後の保存対策のため，関係者に活用されますことを希望し，今後とも，文化財の保護に一層のご協力をいただきますようお願いいたします。

昭 和　50 年　3 月

宮城県教育委員会教育長

津 軽　　芳 三 郎

序

宮前遺跡は，古墳時代に祖先が生活を営んだ跡で，吉田小学校のすぐ裏の通称「学校山」と呼ばれるところに立地している。

この丘陵一帯は，むかしから土器片が散見し埋蔵文化財包蔵地としての存在が予測されていたが，その性格や規模など明確には解っていなかった。ところが，最近の急激な土地開発事業の進展によって，この宮前地域も自然破壊の危機に直面した。このため，急遽，昭和 49 年 3 月町費負担で，県文化財保護課とともに試掘調査を実施した。この調査によって 13 ヶ所の古墳時代の住居跡が発見され，更にこの住居跡が丘陵一帯に広がって分布することが推測された。そこで，同年 7 月から国と県の費用負担で県の事業として本格的調査が開始されることになった。

結果的には，本町としてはもとより，県段階としても古代史を解明する資料として実に貴重なものであることが判明した。こうした埋蔵文化財の保護は，われわれの郷土的環境の保護の一環につらなるとともに郷土の歴史を物語る貴重な学術資料を確保することになる。かつて，先人が生活を営んだ埋蔵文化財の包蔵地は自然環境にもめぐまれ，最近の宅地開発事業等にとっては好適な条件を備えた土地が多い。したがって，埋蔵文化財が好ましからざる影響を受け，壊滅の危機にひんする場合が多い。現実的には残念なことではあるが保護と開発の調整が仲々困難な状況にある。

埋蔵文化財は通例そのままの状態で保存することが最も望ましいわけであるが開発との調整上止むを得ない場合発掘調査を行い，その記録を保存することで現状保存に代える方法がとられている。これが今回の宮前における緊急発掘調査であった。当初 2 ヶ月程度で終了するところであったが予想に反して質量共に多くの資料が発見されたので調査は 12 月末日まで延長された。この間，調査に直接携わった県文化財保護課の関係者の数々の御苦労には全く頭の下がる思いである。ここに一切の調査が終了したことに対し深く感謝を捧げるとともに，関係者の皆様と共に「文化財保存の明るい大きなともしび」である調査結果を世におくることを深く誇りに思う次第である。

亘理町長　山　形　勝　治

例　　言

1.　本書は，宅地造成工事に伴う亘理郡亘理町吉田字宮前所在遺跡の発掘調査概報である。

2.　調査期日：昭和 49 年 7 月 8 日～昭和 49 年 12 月 27 日

3.　調査主体者：宮城県教育委員会

4.　調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課

5.　遺跡総面積：約 80,000 ㎡　調査対象面積：約 15,000 ㎡　実発掘面積：約 6,600 ㎡

6.　調査参加者

調査協力員：丸森町立大内小学校教諭　遠藤久七　　蔵王町立遠刈田中学校教諭　新庄屋 元晴
塩釜市立浦戸第二小学校教諭　一条孝夫

調査補助員：宮城教育大学学生　渋谷正三
東北学院大学学生　渋谷亨，三塚敏明，宍戸義彦，愛沢正典，佐藤房枝，早坂範子
原志津，門馬敦子，阿部照子

地元協力者　阿部茂，石垣康博，青田利男，石間健嗣，石間義郎，岩佐敏夫，遠藤裕二，遠藤繁男
榎和浩，小倉吉春，小野賢一，加藤孝明，片岡誠志，菊地康博，菊地義則
菊池康，佐藤利久，佐藤正一，佐伯昌三，斉敏彦，宍戸広一，真柳伸一
佐藤三郎，高野嘉緒，南条義則，山本清己，山上学，安羅孝宏，横山和広，渡辺晴輔
伊勢しづ江，榎千枝，大沼きしを，大槻てる子，大河原ふき，小山すぎ子，菊地保子
佐伯恵美子，佐伯和子，佐々木せつ子，佐々木とし子，斉藤さとし，真柳美恵子，鈴木
真子，玉田すみえ，只野松子，平間たか，松本敏子，森かね子，末木まつ，山木時子，
渡辺ヨネ，渡辺よね，渡辺知恵子

7.　調査協力機関：亘理町立吉田小学校，宮城県亘理高等学校，亘理町教育委員会

8.　本者に使用した航空写真は亘理町吉田小学校の提供によるものである。

9.　本書の編集・執筆は，宮城県教育庁文化財保護課が次の要項に基づいて行った。

(1)　調査された遺構が多数にのぼったため，本書では，遺跡の性格を最もよくあらわすものを厳選して掲載した。その中で遺構の性格を更に理解しやすくするために適宜関連資料をつけ加えた。尚，特に注意しなければならない項目についてはゴジックにしてある。

(2)　本書では次の基準に基づいて用語図版縮尺等の統一を図った。

- 遺構の平面形に関しては長軸と短軸の差が 10%未満のものを正方形，10%以上のものを長方形とした。住居跡における長・短軸の計測値は下端を使用している。
- 遺構配置図（1/300）の住居跡の周溝，柱穴の柱痕跡は黒くぬりつぶした。
- グリット配置図（1/1000）の遺構はスクリーン・トーンによって時代分けしてある。
- 遺構の実測図は住居全体図が 1/60，その細部が 1/30，小規模な遺構が 1/40，になるよう配慮してある。遺物包含層は全体が 1/100，細部が 1/40 にしてある。その他の図面は 1/40 にしてある。
- 引用・参考文献は本書の性格を考えて必要最小限にとどめた。

目　　次

Ⅰ　調査に至る経過 1

Ⅱ　遺跡の位置と環境
1. 位置と自然環境 2
2. 周辺の遺跡と歴史的環境 4

Ⅲ　調査の方法 9

Ⅳ　調査の経過 11

Ⅴ　調査の成果 13
1. 遺構の分布 13
2. 古墳時代前期の住居跡 13
3. 古墳時代中期の住居跡 24
4. 奈良・平安時代の住居跡 39
5. 土壙 43
6. 焼土遺構 44
7. 溝 45
8. 遺物包含層 46

Ⅵ　調査成果の問題点 49
1. 住居（跡）の構造 49
2. 炉およびカマド 51
3. 宮前遺跡の歴史的構成 53

Ⅶ　調査のまとめと今後の問題点 55
1. 調査のまとめ 55
2. 今後の問題点 55

Ⅰ　調査に至る経過

遺跡の状況：　亘理町は，常盤線，国道6号線などによる交通の便に恵まれ，気候も温暖であるため，宅地造成等の開発が急速に進行している地域である。当遺跡の所在する通称「学校山」の丘陵は昭和46年，仙台市に在住する20数名が宅地造成のために共同購入した土地である。

分布調査：造成予定地は約10,000㎡以上にも及び，数年前に土器が採集されていること，地形的にも集落跡の存在が予想されることにより，分布調査を実施することにした。調査は昭和48年6月に実施され，丘陵の南東斜面を中心として，弥生土器・土師器・須恵器の破片の散布がみられ，遺跡であることが明らかになった。

予備調査：分布調査の結果に基づいて，遺跡の規模や範囲を調べるために，昭和49年2月から3月に亘理町が主体となり，県文化財保護課が担当し，予備調査を実施した。調査は，丘陵全体に7本のトレンチを設定し，遺構の確認を行なった。その結果，丘陵の東尾根の部分に，古墳時代の住居跡が13軒検出された。遺物は古墳時代を主として，奈良・平安時代のものが若干出土した。住居跡は，未調査の部分にも多数存在することが予想され，古代の集落跡として貴重な遺跡であることが明らかとなった。

その後の経過：予備調査の結果から，本調査は大規模な発掘を必要とすることが明らかになったため，亘理町・地権者に報告し協力を求めるとともに，調査費の国庫補助を申請した。一方では，数次の現地調査と亘理町との打ち合わせ会をもち，発掘の準備を進め，国庫補助事業の決定とともに7月8日から発掘調査（本調査）を開始した。

写真Ⅰ　宮前遺跡遠景（南側から撮影）

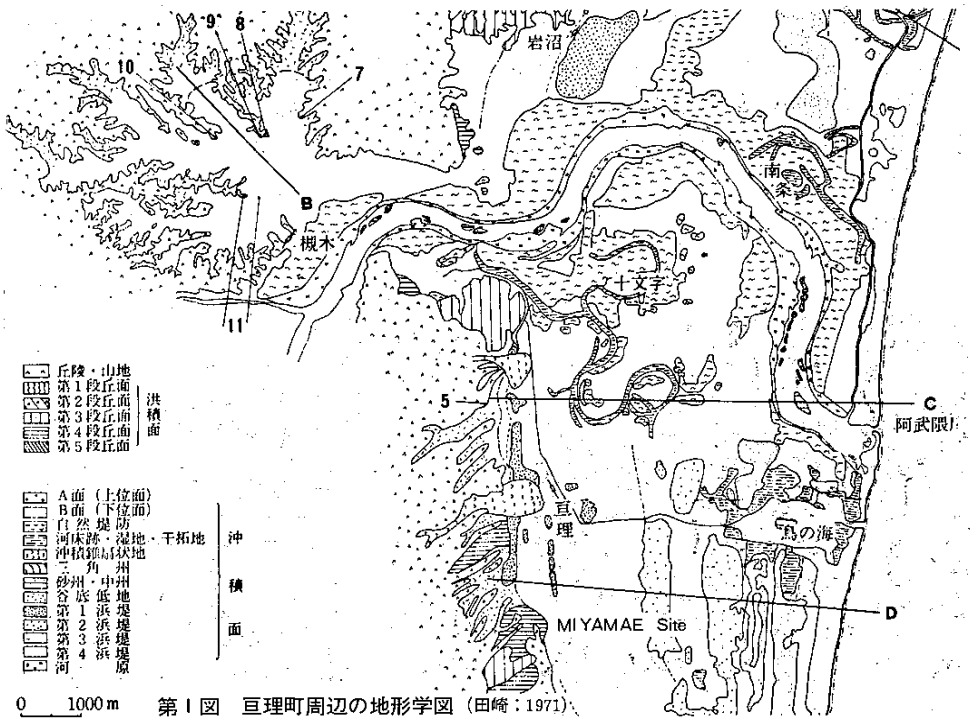
Ⅱ　遺跡の位置と環境

1．位置と自然環境

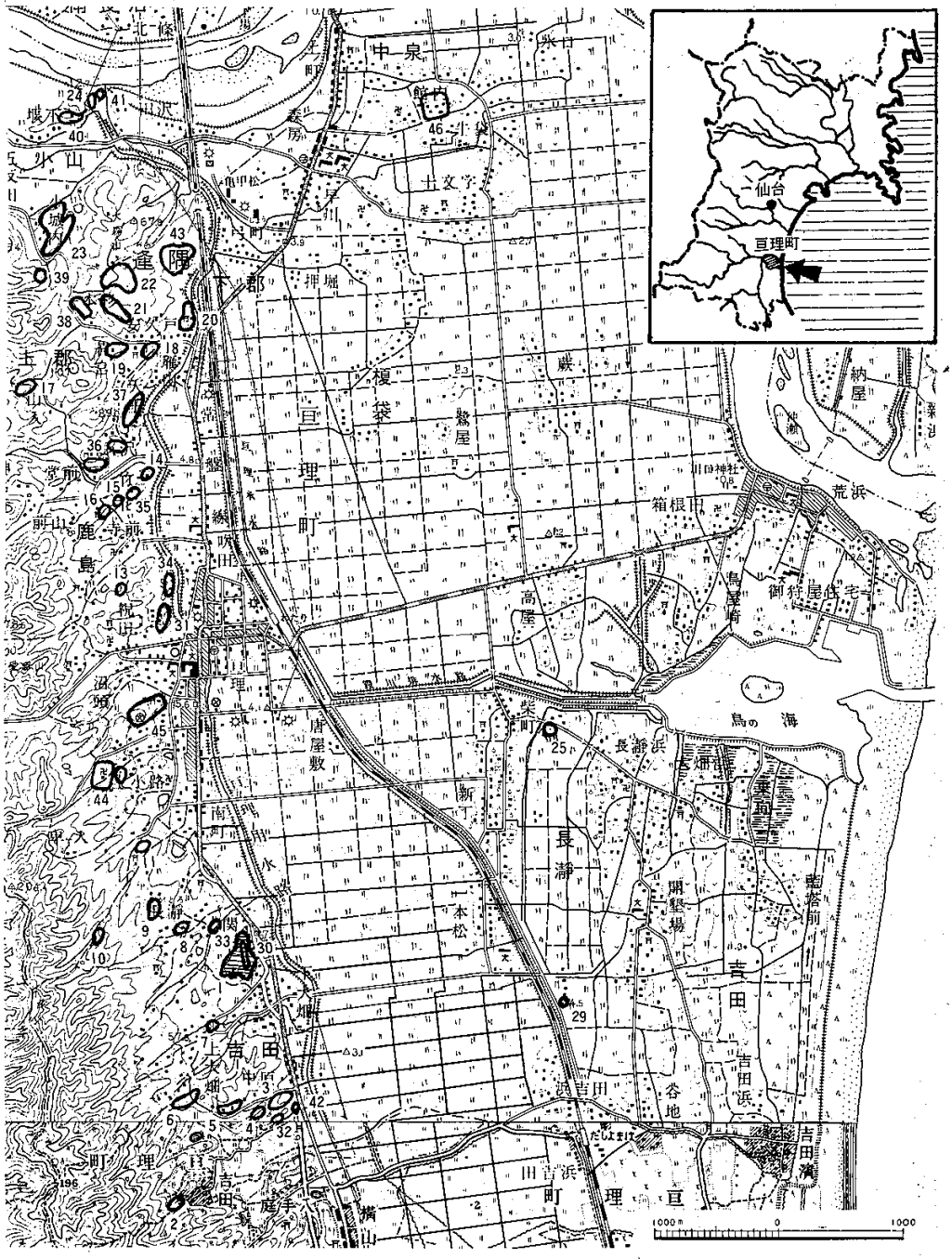
宮前遺跡は亘理郡亘理町吉田字宮前に位置している。常盤線亘理駅の南方約２．８㎞の地点である。

福島県から続く阿武隈山地は宮城県に入ると二つに枝分かれする。東側の支脈は海岸線に沿って北上し，北端が阿武隈川と接する。この支脈は標高200～300mの丘陵で，その縁辺には小河川によって開析された小丘陵（段丘）が分布している。小丘陵の東側には浜提の発達が著しく海岸線に平行して約７列認められる（田崎：1971）。海岸線と小丘陵の間には沖積地が広がっている。この沖積地を流れる阿武隈川は岩沼付近で大きく弯曲しながら太平洋に注ぐ。阿武隈川の両岸には自然堤防が形成され，周辺には蛇行痕（旧河床の痕跡）がみられる。

宮前遺跡は阿武隈山地の縁辺に発達した小丘陵に立地している。この小丘陵は河川の浸蝕によって他の小丘陵群から切り離され独立した形になっている。その間には現在水田化されている谷底低地がある。遺跡が立地する独立丘陵の東側には沖析平野が広がり，遠く太平洋を望むことができる。この独立丘陵は南側に浅い谷があり，尾根状の丘陵平坦面にはゆるやかな起伏がある。この平坦面は標高約30mで，沖積面との比高は約27mである。



第１図　亘理町周辺の地形学図（田崎：1971）



第２図　亘理町の遺跡（分布図）

2．周辺の遺跡と歴史的環境

宮前遺跡周辺には，縄文時代以来数多くの遺跡が営まれている。宮前遺跡が形成された歴史的背景と，以後の歴史について従来の研究成果（松本：1930・志間：1944）を踏まえながら概観してみたい。

生産の基盤が狩猟・漁撈・採集にあった縄文時代にも亘理町内には多くの遺跡が営まれた。現在町内最古の遺跡は，宮前遺跡の南方2㎞の丘陵上にある西囲遺跡で縄文時代早期（約7000年前）の土器片が採集されている。中期以降になると遺跡数も増加してくる。後・晩期には椿貝塚，畑中貝塚のような半鹹半淡の貝塚が形成され，谷の奥深くまで入り込んでいた海岸線が次第に後退していったことを示している。

西日本に伝播・定着した水稲栽培に基礎をおき金属器を伴う弥生文化が東日本にも伝播し，弥生時代へと展開していった。現在，亘理町では8遺跡から弥生土器片が採集されている。遺跡の立地や規模から考えて，谷地などを利用した小規模な稲作が開始されたと考えられる。稲作農業の始まりは単に食生活の変化や経済体制の変革であるばかりでなく，社会のしくみを変化させ，共同体の中に階級社会を成立させる基盤をつくった。

古墳時代になると，雷神山古墳に代表されるように，民衆を支配した首長の絶大な権力を象徴する古墳が築造されるようになる。亘理町内にも，吉田字小橋の浜堤上には，直径約25m，高さ約3.5mの2段築成で埴輪をめぐらす大塚古墳が築造されている。古墳時代も後半になると

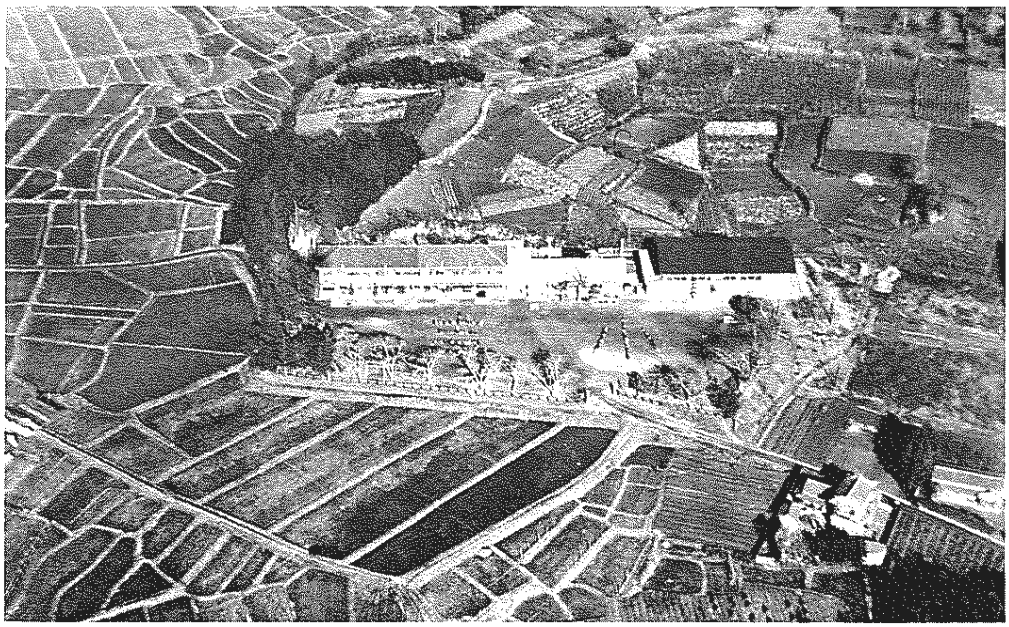


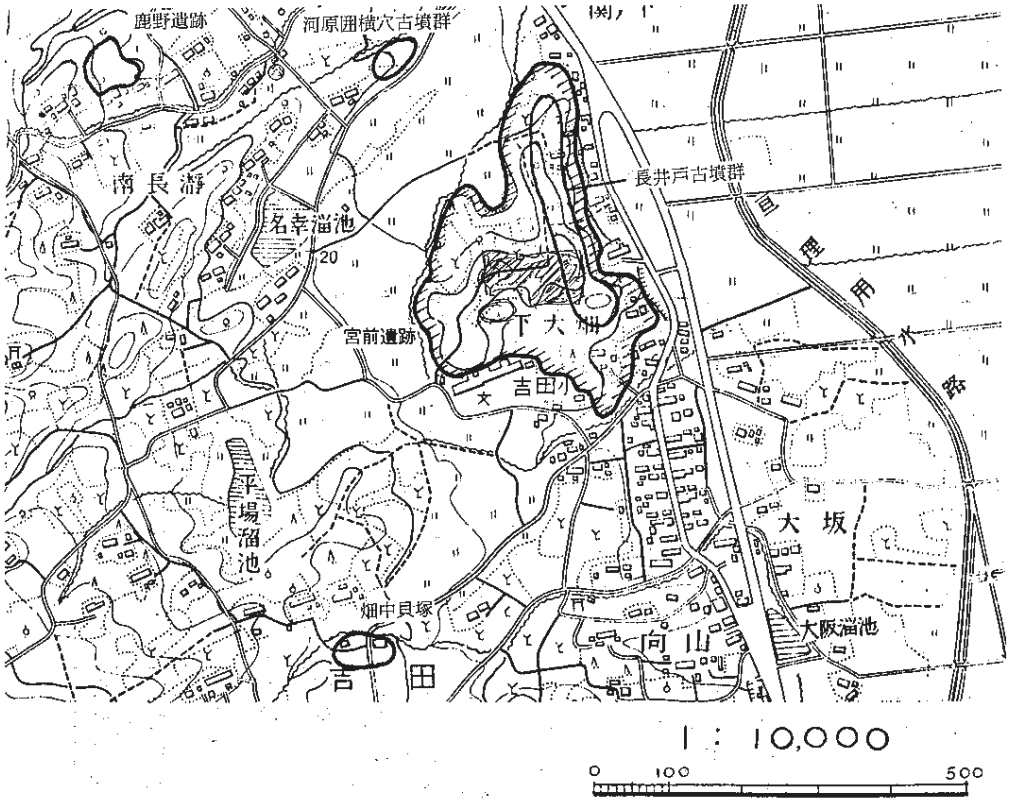
写真2　宮前遺跡遠景（南側上方より望む）

古墳の築造は一部の支配者階級だけでなく，さらに下の階層の人々にも広まり，岩盤をくり抜いた横穴古墳が造られるようになる。町内でも鹿島横穴古墳群など 11 ヶ所の横穴古墳群が発見されている。

奈良・平安時代になると，この地域も律令制度に基いた政治体制の支配下に組み込まれるようになり，この頃多賀城が陸奥の国府として設置された。その結果，豪族によって支配されていたこの地域の一般庶民も国家の直接的支配を受けるようになったが，その生活はいぜんとして苦しいものであった。この時代の庶民の生活跡として，北長瀞遺跡・北鹿島西遺跡等がある。

中世の遺跡としては大雄寺館跡等が知られているが，庶民の実態を示すようなものは明らかにされていない。

宮前遺跡は，弥生時代，古墳時代，平安時代の集落跡であり，このような歴史の流れに位置づけることができる。



第 3 図　宮前遺跡周辺の遺跡

亘理町の遺跡（地名表）

遺跡番号	地図	遺跡名	所在地	種別	時代	出土品	出土品の所在地	文献その他
1	岩沼	宮前遺跡	逢隅鹿島・宮前	包含地	弥生～奈良・平安時代			
2	角田	西田遺跡	吉田・西囲	包含地	縄文時代（早）	槻木2式期の土器		
3	岩沼	中原遺跡	中原	包含地	古墳時代	曲玉（瑪瑙製）・土師器類	渥美政助	
4	角田	ハナレ森遺跡	吉田・中原	包含地	弥生時代	桜井式土器片・製鉄関係遺物	渥美政助	
5	岩沼	中原西遺跡	吉田・中原	包含地	弥生時代 平安時代	弥生・土師器・須恵器		
6	岩沼	一の坂遺跡	吉田・一の坂	包含地	弥生・奈良・平安時代	弥生・土師器・須恵器		
7	岩沼	畑中貝塚	吉田・畑中	貝塚	縄文時代（後・晩）	土器（縄文後・晩期）石器	町史編さん	
8	岩沼	鹿野遺跡	長瀞・鹿野	包含地	縄文時代	石器・縄文土器		
9	岩沼	北長瀞遺跡	長瀞	包含地	平安時代	土師器・須恵器		
10	岩沼	竜円寺遺跡	逢隈・竜円寺前	包含地	縄文時代 平安時代	縄文土器片 須恵器片		
11	岩沼	松栗囲遺跡	松栗囲88の2	包含地	縄文時代 古墳・奈良時代	縄代状施文土器片・古式土師高坏片・陶車使用土師器・須恵器		
12	岩沼	泉ケ入遺跡	泉ケ入91	包含地	縄文時代（中）	大木9式土器片・内黒土師・須恵器		
13	岩沼	寺前遺跡	鹿島・寺前	包含地	古墳時代（後）			
14	岩沼	竹ノ花遺跡	逢隈鹿島・竹の花	包含地	奈良時代・平安時代	土師器片		

15	岩沼	北鹿島遺跡	逢隈鹿島・北鹿島	包含地	縄文時代（晩）			
16	岩沼	北鹿島遺跡	逢隈鹿島・北鹿島	包含地	奈良時代	須恵器片・土師器片		
17	岩沼	山入遺跡	逢隈上郡・山入	包含地	縄文時代（中・後）	石斧約10点	橋本幸徳	
18	岩沼	椿具塚	逢隈・上郡椿	貝塚	縄文時代（後・晩）	縄文土器・骨角器・石器	亘理町公民館	志間：1965 47年3月教委調査
19	岩沼	若宮遺跡	上郡・若宮64	包含地	古墳時代	内黒土師器片・須恵器片		
20	岩沼	石間神社遺跡及び館跡	逢隈・下郡石間	包含地 館跡	弥生時代 中世	石斧・石包丁3	亘理町公民館	下郡村安永風土記御用書出
21	岩沼	小松堂遺跡	逢隈・八ツ入	包含地	縄文・弥生時代 平安時代	縄文土器（中期末）石包丁・土師器・須恵器		
22	岩沼	八ツ入遺跡	下郡八ツ入36・56	包含地	縄文時代（中）奈良・平安	大木9式・内黒土師器片		
23	岩沼	小城内遺跡	田沢・小城内 146 147	包含地 館跡	縄文時代（前・中）中世	繊維土器・大木9・10式土器・土師器		
24	岩沼	堰下囲遺跡	逢隈田沢・堰下	包含地	縄文時代 古墳時代	大木1式・古式土師		
25	岩沼	大橋貝塚	長瀞浜・大橋	包含地	奈良・平安時代			
26	岩沼	館南遺跡	館南	包含地	弥生時代	石包丁		地点不明
27	岩沼	大森山遺跡	逢隈・大森山	包含地	弥生時代	石包丁4	逢隈中学校 斉藤良治	志間(1956):「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」
28	岩沼	牛橋遺跡	吉田・牛橋	包含地	古墳時代			地点不明
29	岩沼	大塚古墳	吉田・小橋大塚	円墳（？）	古墳時代	円筒埴輪	吉田公民館	志間(1956):「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」
30	岩沼	長井戸古墳群	長瀞・長井戸14	円墳	古墳時代	5基 土師器片 須恵器片		

31	岩沼	桜小路横穴	桜小路	横穴古墳 前方後円墳	古墳時代	横穴古墳—9基 前方後円墳(?)—2基		志間(1956):「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」
32	岩沼	松崎横穴	吉田・松崎囲	横穴古墳	古墳時代(後)			志間:1956煙滅
33	岩沼	河原田横穴古墳群	吉田・河原田	横穴古墳	古墳時代	3基		志間(1956):「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」
34	岩沼	鹿島横穴古墳群	逢隈・鹿島八幡堂	横穴古墳	古墳時代			
35	岩沼	竹の花横穴古墳群	逢隈・竹の花	横穴古墳	古墳時代			1基・志間:1956 45年8月県教委調査
36	岩沼	袖ケ沢横穴古墳群	逢隈神宮寺・袖ケ沢146	横穴古墳	古墳時代(後)	須恵器・甕・魂・直刀	亘理町	
37	岩沼	雁田横穴古墳群	上郡・雁田 22・30・31	横穴古墳	古墳時代(後)	鉄環・直刀・玉類		
38	岩沼	提ノ内横穴古墳群	上郡・提の内 78・82	横穴古墳	古墳時代	須恵器・瓶・大甕・瓶・坏・横瓶	亘理町	
39	岩沼	中沢横穴古墳群	逢隈小山・中沢36	横穴古墳	古墳時代			
40	岩沼	阿福河伯神社付近横穴古墳群	逢隈田沢・堰下219	横穴古墳・地下式横穴古墳?	古墳時代(後)	土師・須恵器片・直刀・玉		
41	岩沼	田沢横穴古墳群	逢隈・田沢	横穴古墳	古墳時代			4基・磨崖仏を含む
42	岩沼	中原窯跡	吉田・中原	窯跡	平安時代			志間:1956煙滅
43	岩沼	三十三間堂遺跡	逢隈下郡・椿山98 110	館跡	平安末～鎌倉?	土師器・須恵器片	県教委	風土記御用書出(安永8) 大類伸,仙台郷土研究(1931
44	岩沼	大雄寺館跡	泉ケ入91	館跡	中世			宮城県文化財調査報告告書第十三集
45	岩沼	臥牛城	旧館32	館跡	近世・江戸			
46	岩沼	十文字館跡	逢隈十文字・大手囲49	館跡	中世			仙台古城書上

Ⅲ　調査の方法

文化財保護課で実施している遺跡の調査方法については既に刊行されている各遺跡の報告の中で述べられている。宮前遺跡の調査もこれらと本質的に異なるものではない。しかし，遺跡の特性に応じて部分的に異なる点もあるので，簡単にその概要を述べておきたい。

調査区の設定：調査区のほぼ中央に2つの原点（Ａ・Ｂ）を定め，原点ＡとＢを結んだ軸線を基準として，それに直交する線を設け3mグリットを組んだ。なお，この原点は予備調査で使用したものと同じである。グリットの名称については，原点Ａの北側を61区、南側を60区、東側をＡＴ区、西側をＢＡ区としてそのNo.を延長した。さらに，アルファベットによる区名の表記についてはＡ－Ｔをひとつの大きな単位とし，その単位ごとに（20区－60m）を区別する方法をとった（ＡＡ－ＡＴ・ＢＡ－ＢＴ区等）。

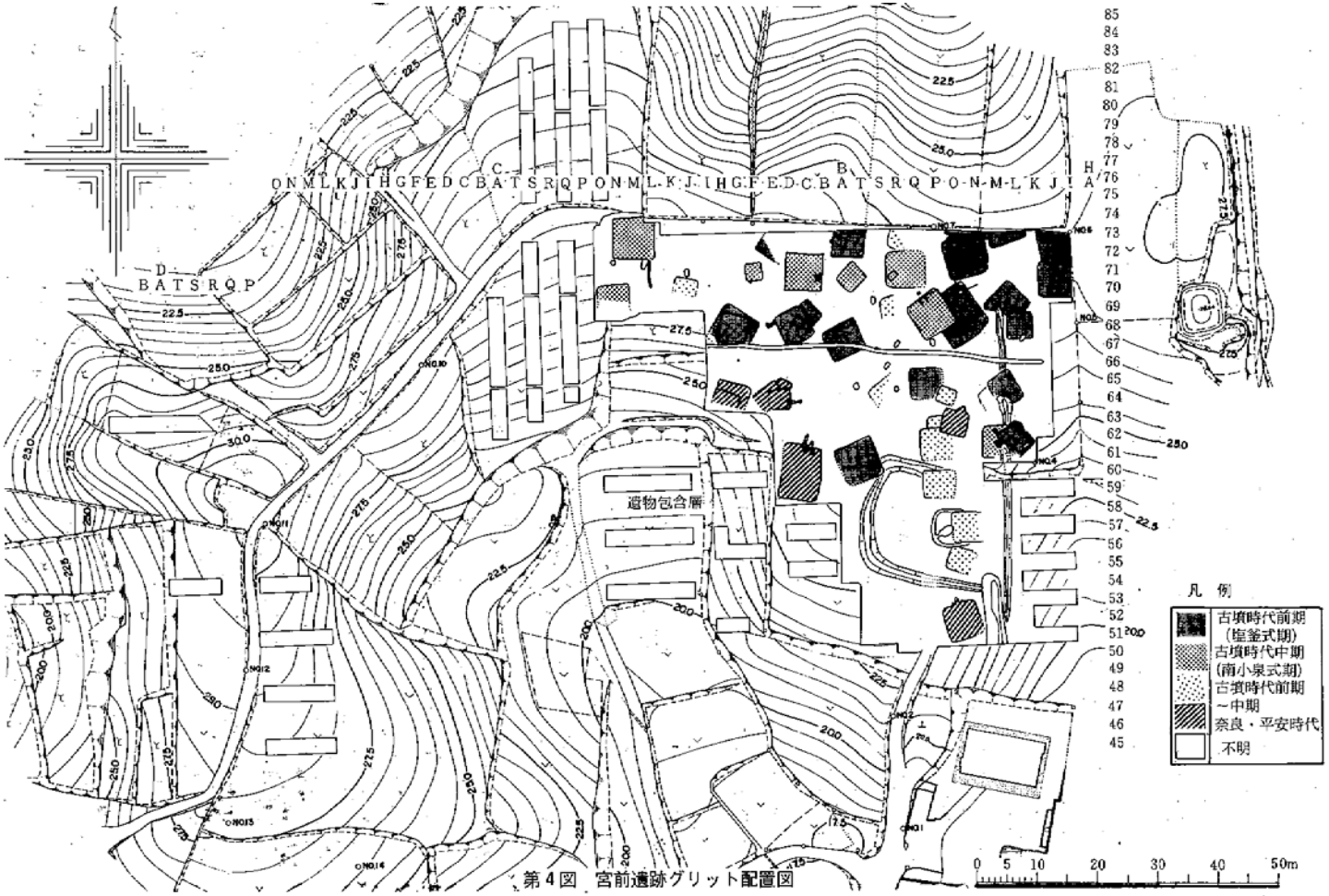
発掘の方法：調査区全体にどのような遺構が分布しているのか検討するために微地形を考慮しながらトレンチを設定した。このトレンチ調査の結果，調査区の東側に濃密な住居跡の分布が確認されたのでほぼ全面を発掘することにした。

住居跡の発掘は，原則として四分法をとり，各区画に北東側から時計まわりにＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの名称をつけた。発掘に際しては，できるだけ堆積層の分布，堆積方向（土砂の流入方向）・堆積層と遺物の関係について検討を行ない，遺物に区画名と層名を併記してとりあげた。焼土遺構や土坑の規模が小さいものについては二分法をとることにした。

記録の作成：発掘を実施した部分については，遺構の有無にかかわらず，すべて1/20の平面図を作成しレベルを記入した。原則として遣り方測量を実施したが，トレンチ設定段階で遺構が検出されなかった部分については，簡易遣り方測量を行った。遺構については，必要に応じて1/20の断面図を作成し，層の堆積状況・層相（土色・土性・混入物・その他）の観察結果を記載した。土色は，新版標準土色帖（小山・竹原：1967）を使用し，土性は，国際土壌学会法の粒径区分を参照している。認識された層は，共通する特徴によっていくつかの層群としてまとめ層群相互の関係を検討することによって成因の理解に努めた。なお，遺構内の層の堆積については，周辺の微地形が密接な関連をもっていることが判明した。そのため，今回の報告では遺構の平面図に周辺の微地形を示すために10㎝ごとの等高線を書きこんである。

実測図の他に写真による記録の作成を行なった。遺構の全景，細部，堆積土の状況，遺物の出土状況等について撮影してある。

以上の他に，東北地形社に依頼して調査区を主体とした宮前遺跡の1/500地形図を作成した。その成果は，グリット配図等に盛り込んである。



第4図　宮前遺跡グリット配置図

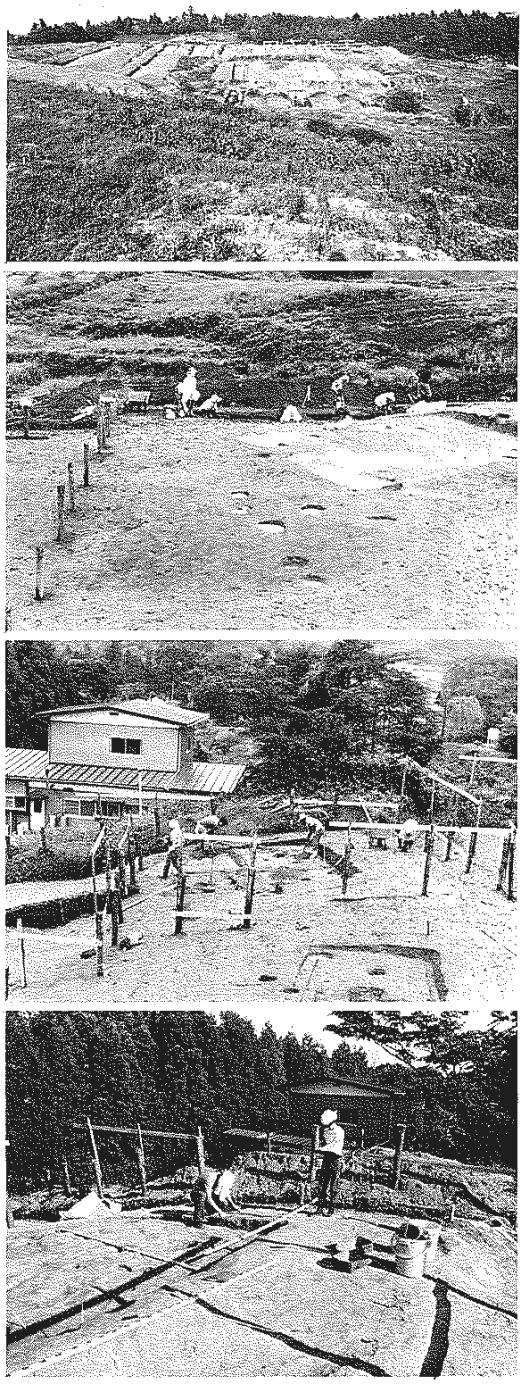


写真３　調査風景

Ⅳ　調査の経過

調査開始：発掘調査を開始するために器材を運搬し，テントを設営したのは７月８日であった。

遺跡は草木が密生しているため細かな地形がわからなくなっていた。調査対象区域を示す境界杭（宅地造成用）も草の中にまぎれて所在がわからない。このため，調査は草木の刈り払いと境界杭の探索から始めねばならなかった。

グリットを設定して，粗掘りを開始したのは７月13日である。粗掘りは南側に張り出した緩斜面から着手した。微地形を考慮しながら５グリット単位のトレンチを設定し，遺構の検出に努めた。その結果，中央から東側に傾斜した部分に数軒分の竪穴住居跡が確認された。そこで，遺構検出のためのトレンチ調査をさらに北側へ拡大する一方，住居跡が確認された部分を拡張することにした。

精査開始：７月23日から粗掘りと併行して精査を開始した。協力員と補助員を中心として，まず第14住居跡の発掘にとりかかった。調査は，第14住居跡から第15住居跡，第16住居跡へとおよんだ。住居跡の発掘が進行した段階で測量の準備を始め，遣り方を設定した。この間に遺構の分布状況を知るためのトレンチ調査は，南側の谷に達した。谷の部分には，厚い遺物包含層が堆積していることが明らかとなった。このころ，夏の暑さ

が頂点に達した。

現地説明会の開催丘陵の平担面と緩斜面に数 10 軒の竪穴住居跡が分布していることが確認され，その一部については調査が終了していた。そこで，調査成果の中間報告という形で第 1 回目の現地説明会を開いたのは 9 月 16 目である。

調査区の拡大：現地説明会以後，住居跡の確認が行なわれていた丘陵の平担面と緩斜面の表土を全面にわたって排除した。そして，遺構の発掘は本格化した。

秋も深まってきた 11 月には，発掘された竪穴住居跡の数は 50 軒を超え，その他焼土遺構や土坑等もあい次いで発見された。その結果，宮前遺跡が今まで調査例の少なかった古墳時代前期を主体とした集落跡であることが判明してきた。また，古墳時代中期の住居跡も次々と発見され，この時期になるとカマドをもった住居跡が出現することが明らかとなった。このことは，各地に話題をまき見学者があいついだ。

第 2 回現地説明会：宮前遺跡の姿は，第 1 回目の現地説明会以後大きく変貌していた。そこで，今回の調査で明らかとなったことの最終的現地公開として，第 2 回目の現地説明会を 12 月 15 目に開いた。冬の寒風の中での説明会であったが，熱心な見学者が集った。

調査の終了：開始の日から半年におよぶ調査を終了したのは 12 月 27 日である。

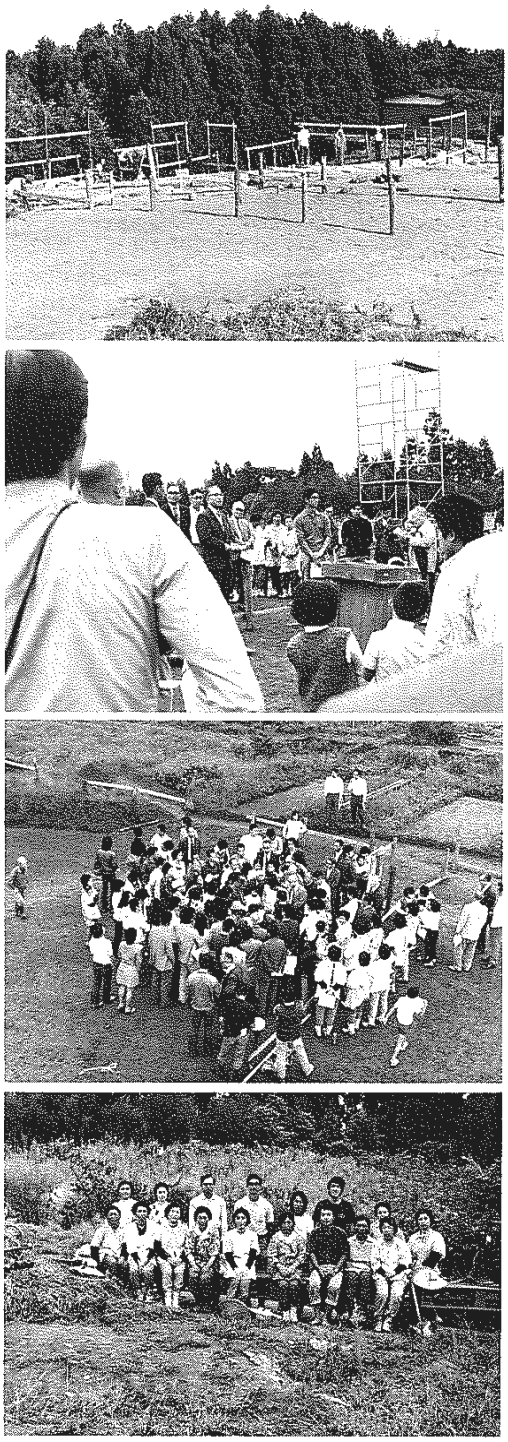


写真 4　現地説明会等

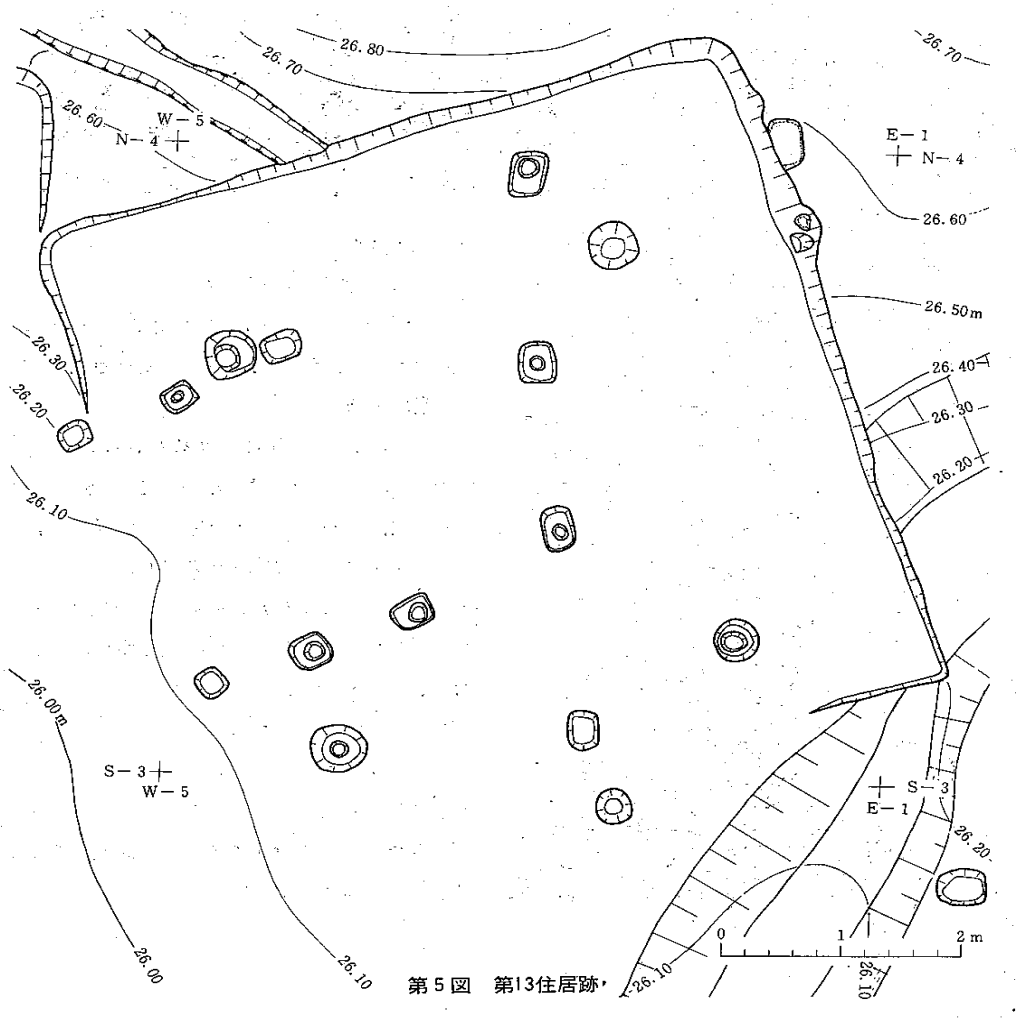
V　調査の成果

1．遺構の分布

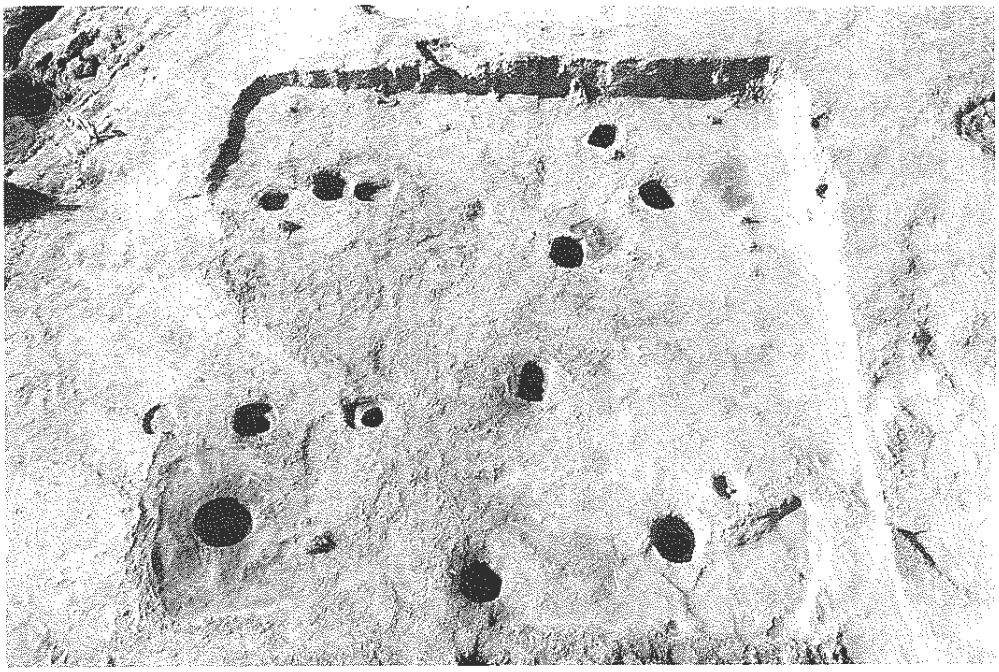
ゆるやかな起伏をもった丘陵上の平坦面と谷に面する南側斜面から竪穴住居跡をはじめとして，数多くの遺構が発見されている。また，谷の部分には厚い遺物包含層が形成されている。

今回の調査によって発見された遺構には竪穴住居跡56軒，焼土遺構8基，土坑6基，その他に溝状遺構等がある。これらの遺構からは古墳時代前期～奈良・平安時代の遺物が出土しており，宮前遺跡が非常に長い期間にわたって形成された古代の集落跡であることを示している。

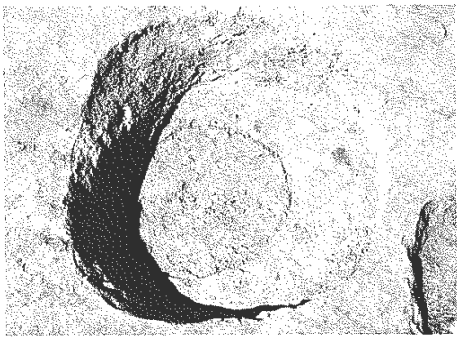
2．古墳時代前期の住居跡



第５図　第13住居跡



全景



柱穴

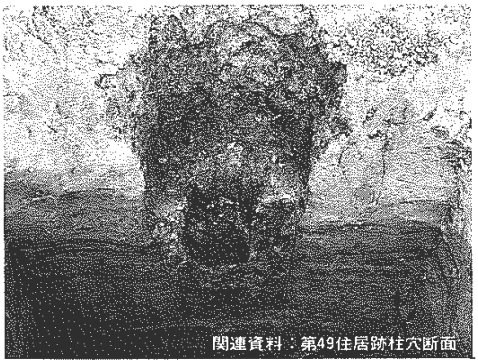


写真5　第13住居跡

第13住居跡

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）長軸6.00m，短軸6.30mの規模をもつ正方形の住居跡で，長軸方向は北東一南西である。

（床面）住居南側に貼床が認められる。

（柱穴）床面を露出した段階で，計 15 個のピットが検出された。配列状態・柱痕跡の有無から，4 個の主柱穴配置が考えられる。柱穴は写真のように掘り方と柱痕跡を明瞭に区別することができた。柱穴の間隔は東西3.40m，南北3.80mである。

（周溝）検出されなかった。

（炉）　検出されなかった。

（貯蔵穴）検出されなかった。

〔関連資料〕第49号住居跡の柱穴断面である。掘り方と柱痕跡が明瞭である。

第10住居跡

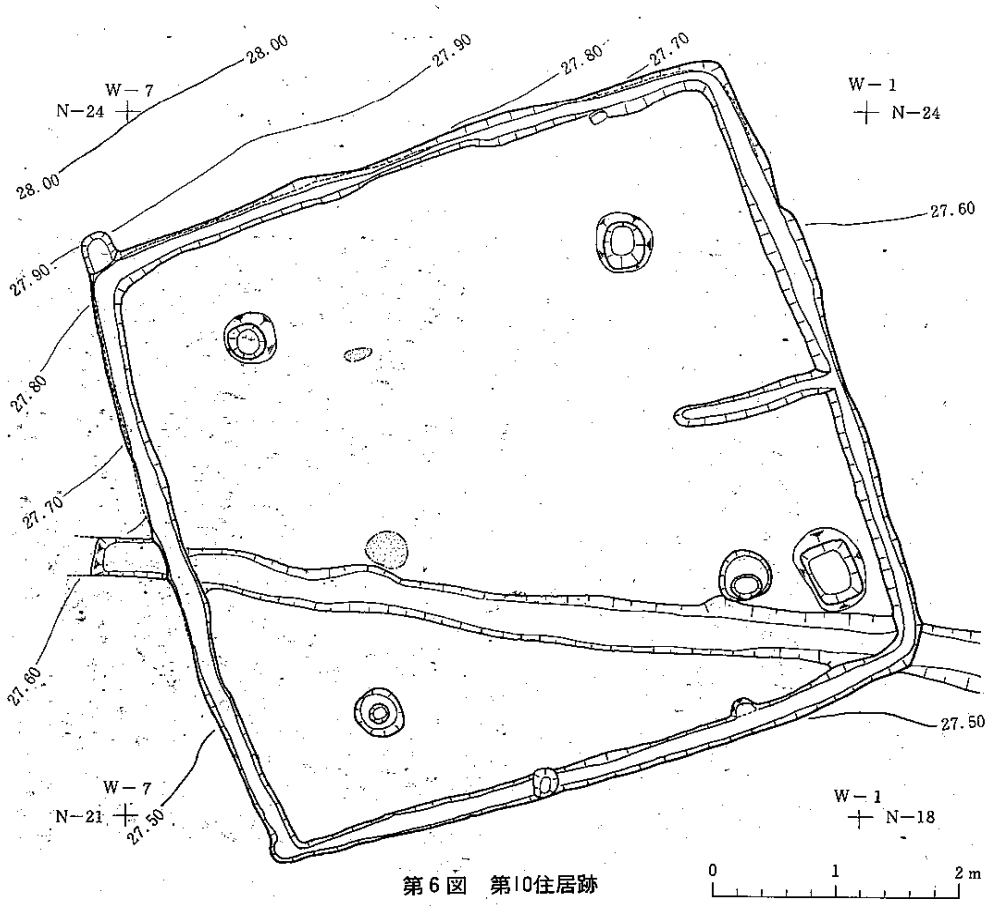
（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）南壁全部と西壁の一部が削平され，失われている。しかし，周溝が残っているので，平面形を推定できる。長軸5.70m・短軸5.50mの規模をもつ正方形の住居跡で，長軸方向は北東―南西である。

（床面）一部削平され，北東隅がわずかに高いが，ほぼ水平である。床面を露出した段階で，7個のピットと2ヶ所の焼け面を検出した。

（柱穴）床面から 7 個のピットが検出されている。ピットの配列状態・柱痕跡の有無から，4個の柱穴が考えられる。柱穴の間隔は3.20～3.30mで，ほぼ正方形の配置を示している。他の3個のピットは，住居廃絶後に掘られたものと思われる。

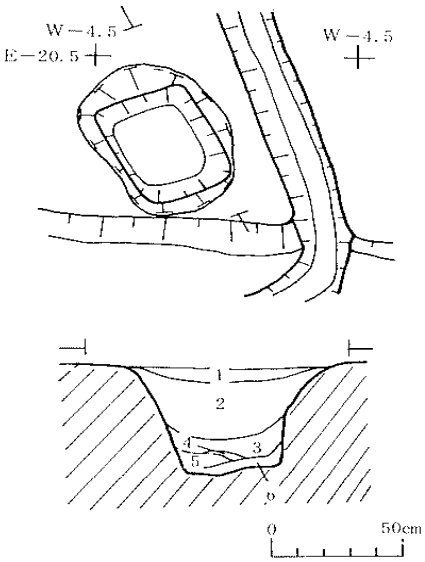
（周溝）幅15～25㎝・深さ約10㎝の周溝が壁に沿って1本まわっている。北壁の大部分，および東・西壁の北半の周溝は，壁をえぐるように掘り込んでいる。また，東壁の周溝と接続する溝が直角に柱穴を結んだ線上までのびている。



第6図　第10住居跡

（炉）床面が赤褐色に焼けて，固くなっている部分が2ヶ所ある。床面中央から北西に偏った部分は，20×10 cmの範囲である。この南側にある中央西よりの部分は，30×30 cmの範囲をもつ。これらは，炉と考えられる。

（貯蔵穴） 床面東南隅付近に位置する。長軸52 cm・短軸39 cmの規模をもち，深さは38 cmである。平面形は隅丸長方形であり，長軸方向は北西―南東である。堆積土は3層に大別される。



第7図　第10住居跡貯蔵穴

第1層（№1～№4層）：褐色の粘土質シルト層で，含有物によって№1～№4層に細分できる。№1層―褐色（10YR4/6）粘土質シルト層，№2層―褐色（10YR4/6）粘土質シルト層で，地山の小粒を斑状に含有している。№3 層―褐色（10YR）粘土質シルト層で、炭化物を含有している。№4 層―黄褐色（10YR5･6）粘土質シルト層で、№3層と№5層の間にブロック状に堆積している。

第2層（№5層）：灰黄褐色（10YR4･2）シルト質粘土層で，地山の小粒を含有している。

第3層（№6層）：黒褐色（10YR3･1）シルト質粘土層で貯蔵穴の最下底部に堆積している。

どの堆積層も貯蔵穴中央部が凹むような状態で堆積している。また，№4～6層の上面，№3層中より，甕口縁部破片が出土している。

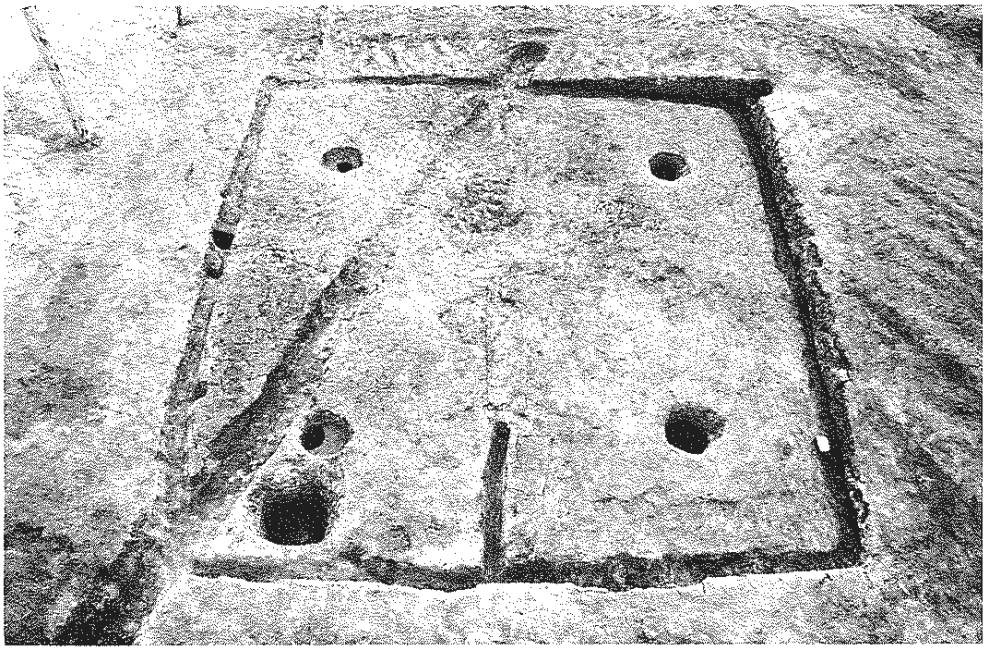
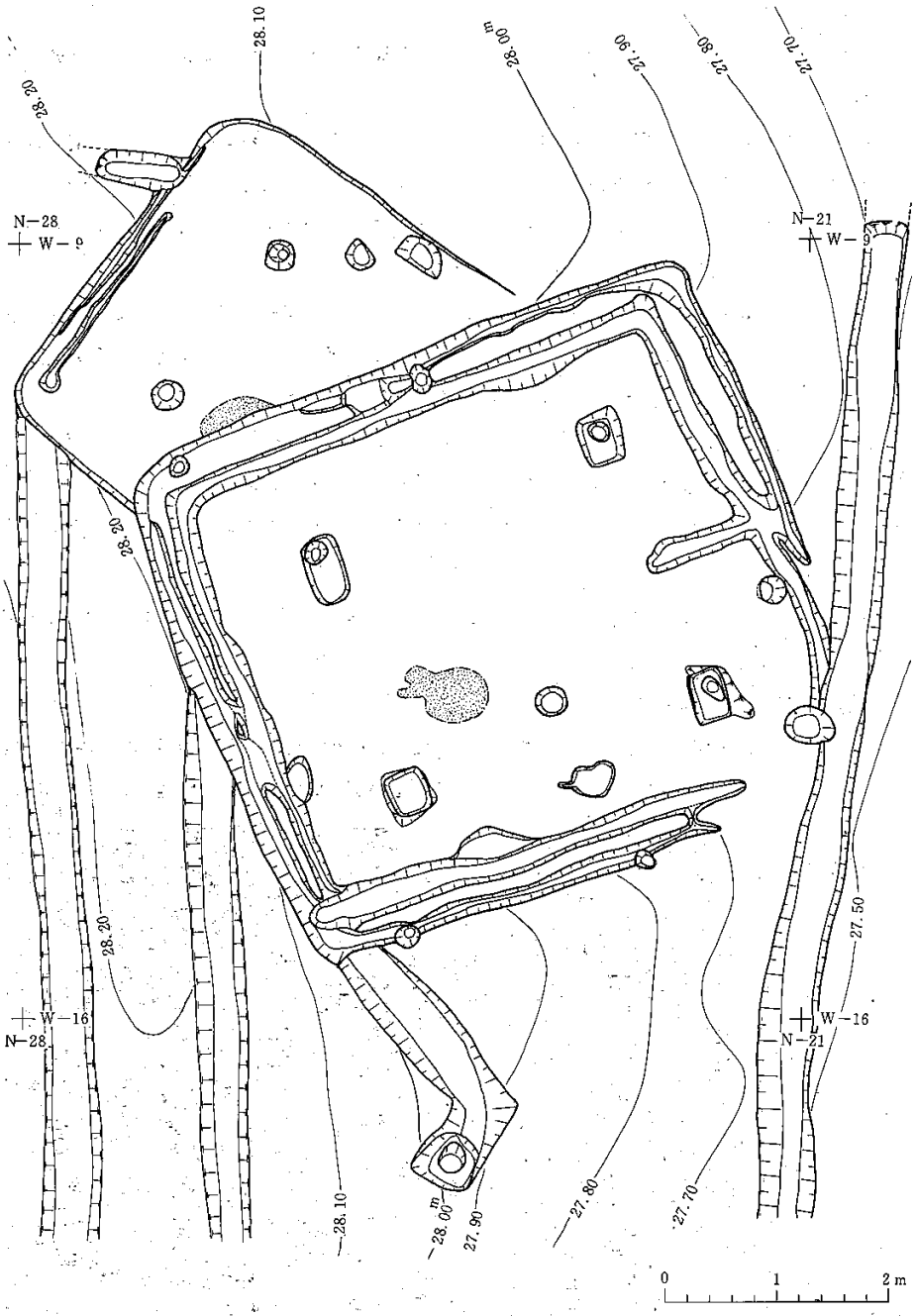


写真6　第10住居跡全景



第８図　第46・47住居跡

第46住居跡

（**重複・増改築**）第47住居跡と重複している。第47住居跡が廃絶され，埋まった後に構築されている。

（平面形・方向）北西隅付近の壁が削平されてしまっているが，おおよその規模を推定できる。長軸5.40m，短軸4.80mの規模をもち，長軸方向は北西―南東である。平面形は長方形である。

（床面）砂質の地山をたたきしめたような固い床である。床面南側には貼り床の痕跡が認められる。床面はほぼ水平であるが，北東隅がやや高くなっている。

（柱穴）床面上から計11個のピットが検出された。各ピットの形態，配置状態および，柱痕跡の有無から4個の主柱穴と考えられる。柱穴の掘り方はいずれも長方形である。柱穴の間隔は東西2.50m，南北2.70mで南北にやや長い長方形の配置を示している。

（**周溝**）周溝は，住居跡の壁に沿って二重にまわっている。壁に接してまわる周溝（幅10～25㎝）は，北東隅と南東隅で途切れる。この周溝に較べやや幅の広い周溝（幅20～30㎝）が平行に内側をまわっている。また外側の周溝と接する溝が，柱穴を結んだ線の中央まで直角にのびている。

（炉）床面中央部から若干北西に偏った部分が，80×50㎝の範囲で赤褐色に焼けて固くなっている。

（貯蔵穴）検出されなかった。

（関連資料―第47住居跡）第46住居跡によって$^{1}/_{3}$ほどがこわされている。長軸が3.50m前後の小規模な住居跡である。柱穴は2個しか残存していないが4個の主柱穴の配置が考えられる。

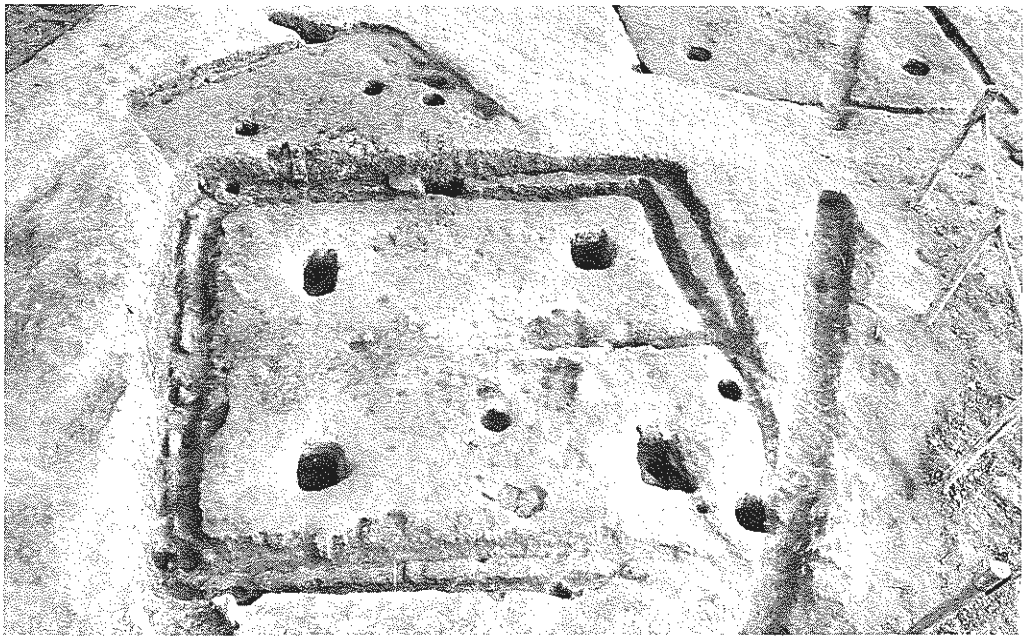
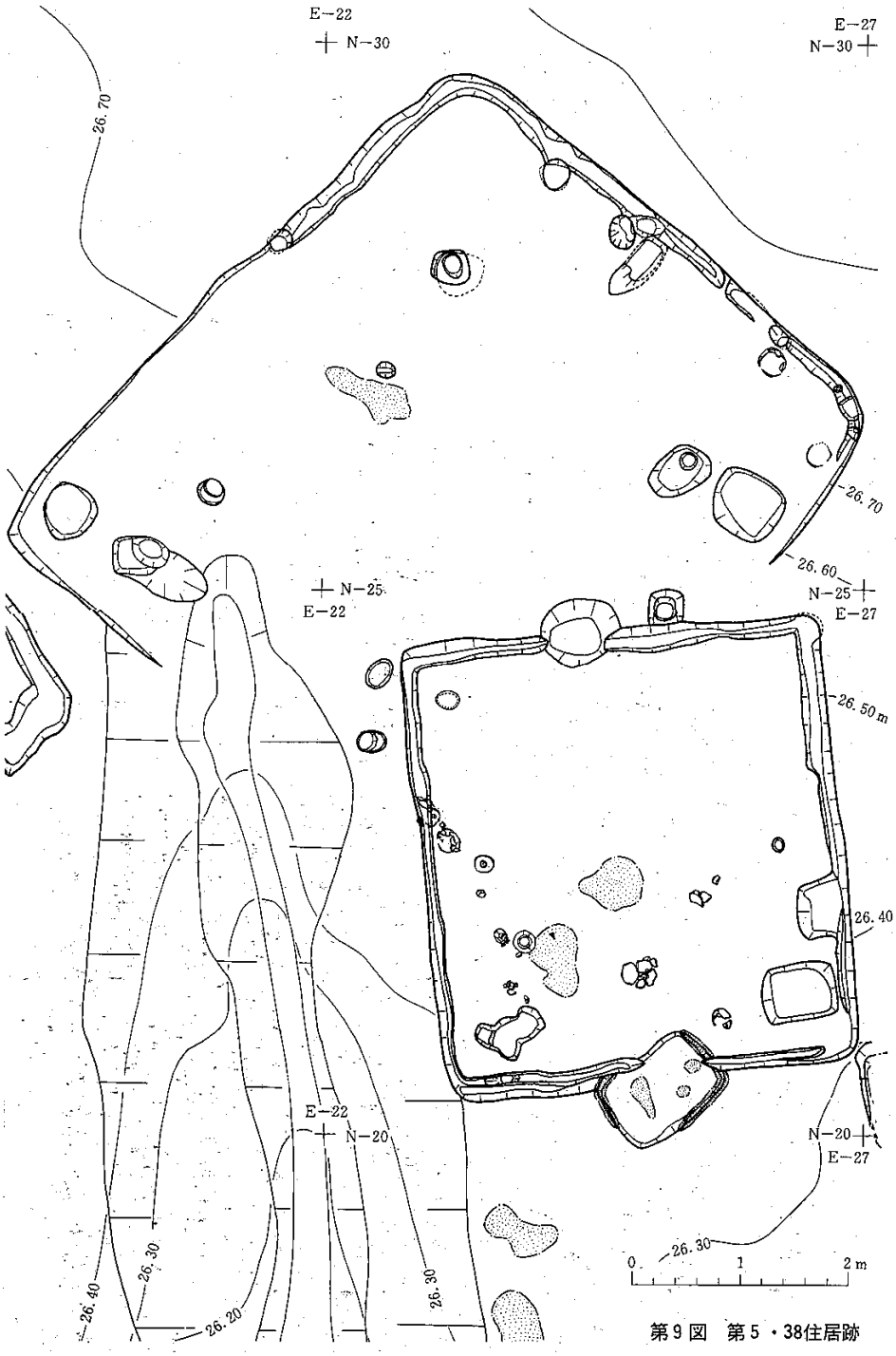


写真7　第46・47住居跡全景


E−22
N−30
E−27
N−30
26.70
26.70
26.60
N−25
E−27
N−25
E−22
26.50m
26.40
E−22
N−20
N−20
E−27
26.30
26.40
26.30
26.20
26.30
0
1
2m

第9図　第5・38住居跡

第38住居跡

（重複・増改築）第4・5住居跡と重複しているが，新旧関係は不明である。

（平面形・方向）長軸3.90m，短軸3.80mの正方形で，長軸方向がほぼ北一南である。

（床面）ほぼ平担で固い。

（柱穴）検出されず。

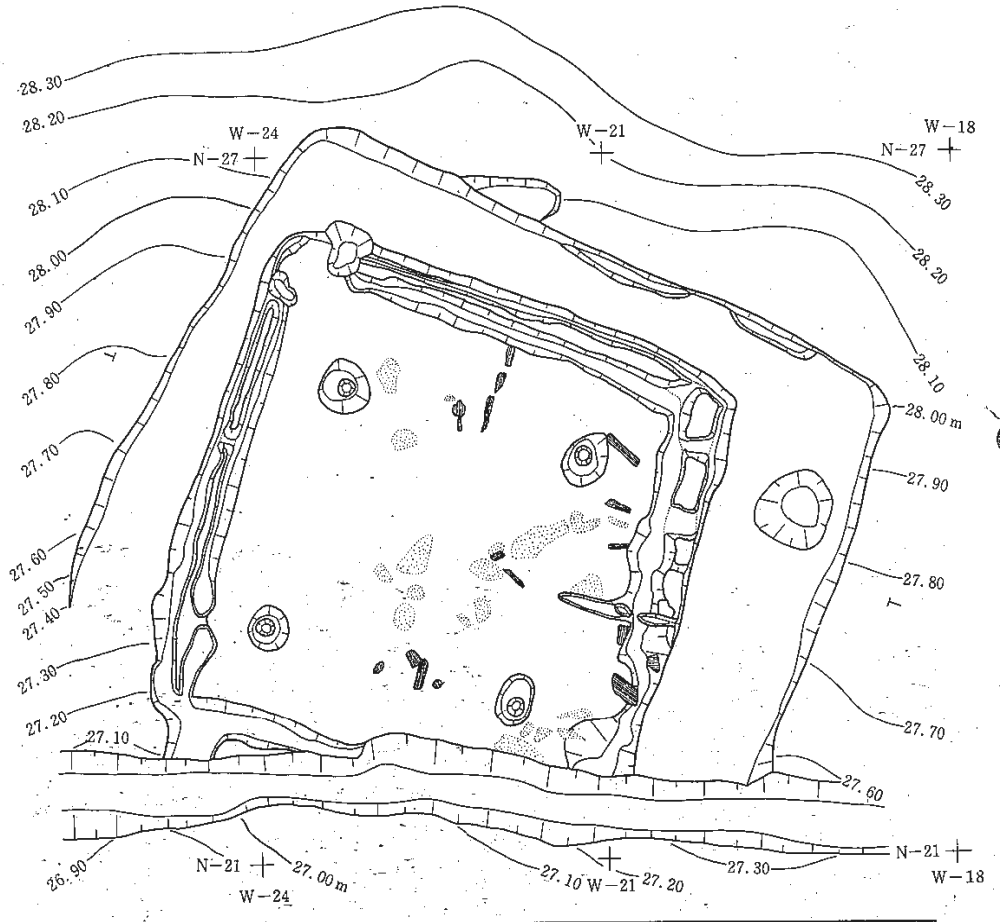
（周溝）西壁沿に周溝があり，深さは約2～8㎝である。

（炉）床面中央部から南西よりに，焼けている部分が2ヶ所ある。

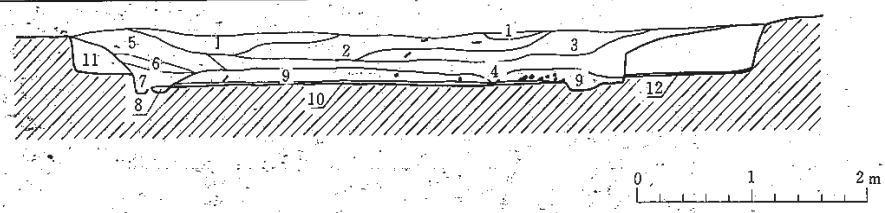
（貯蔵穴）住居跡東南に隅丸方形のピットがある。このピットは長軸70㎝，短軸50㎝，深さ20㎝の規模をもつ。堆積土は褐色および暗褐色砂質シルトで，いずれも固く木炭を含み遺物も出土している。埋まり方はほぼ水平である。

（**遺物の出土状況**）床面直上からまとまった遺物が出土している。これらは完形品となるものが多く器種として甕・壺・甑・高坏等がある。いずれも古墳時代前期塩釜式土器の特徴を備えており，この時期における土器の組み合わせを知る上で貴重な資料となる。

写真8　第38住居跡　上：掘りあげ
下：遺物出土状況



	層位	層No.	土色	土性	備考
第49住居跡	第1層	1	褐色(10YR4/4)	シルト	
	第2層	2	黒褐色(10YR2/3)	シルト	焼土・木炭の細粒(直径2～5mm)を多量に含む
	第3層	3	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土・木炭の細粒(直径1～2mm)を僅かに含む
	第4層	4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	明褐色(7.5YR5/8)粘土質シルトのブロックを多量に含む
		5	暗褐色(10YR3/4)	シルト	明褐色(7.5YR5/2)粘土質シルトの細粒(直径1～5mm)を僅かに含む
		6	黒褐色(10YR2/3)	シルト	特になし
		7	褐色(10YR4/4)	シルト	明褐色(7.5YR5/8)粘土質シルトの細粒(直径2～5mm)を多量に含む
		8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	特になし
	第5層	9	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭片・炭化材・焼土ブロックを多量に含む
	第6層	10	暗褐色(10YR3/3)	粘土質シルト	非常に粘りがある。
第50住居跡	第1層	11	明褐色(7.5YR5/8)	粘土質シルト	褐色(7.5YR4/4) シルトを多量に含む
	第2層	12	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	非常に粘りがある



第10図　第49・50住居跡

第49住居跡

（重複・増改築）第50住居跡を切っている。したがって，第50住居跡が使われなくなって埋ってしまった後に第49住居（跡）がつくられたと考えられる。

（平面形・方向）長・短軸とも4.20mの規模をもつ隅丸正方形で，方向は北北東―南南西か南南東―北北西である。なお，この住居跡は南東の壁周辺が新しい溝によって壊されている。

（**堆積土**）住居跡内の堆積土は次の5層に大別される。

第1層（褐色シルト層）：最上層で，第2層の凹んでいる部分に認められる。分布も狭い。

第2層（黒褐色シルト層）：住居の中央部に堆積しており，第1層より広い分布をもつ。木炭や焼土の細粒を多量に含むのが特徴である。

第3層（暗褐色シルト層）：住居の東側に堆積しており，僅かに焼土や木炭を含む。

第4層（明褐色粘土質シルトブロック混入土層）：住居全域に厚く堆積しており，壁周辺に向うに従って厚さを増す。この層は明褐色粘土質シルトのブロックを含むのが特徴である。

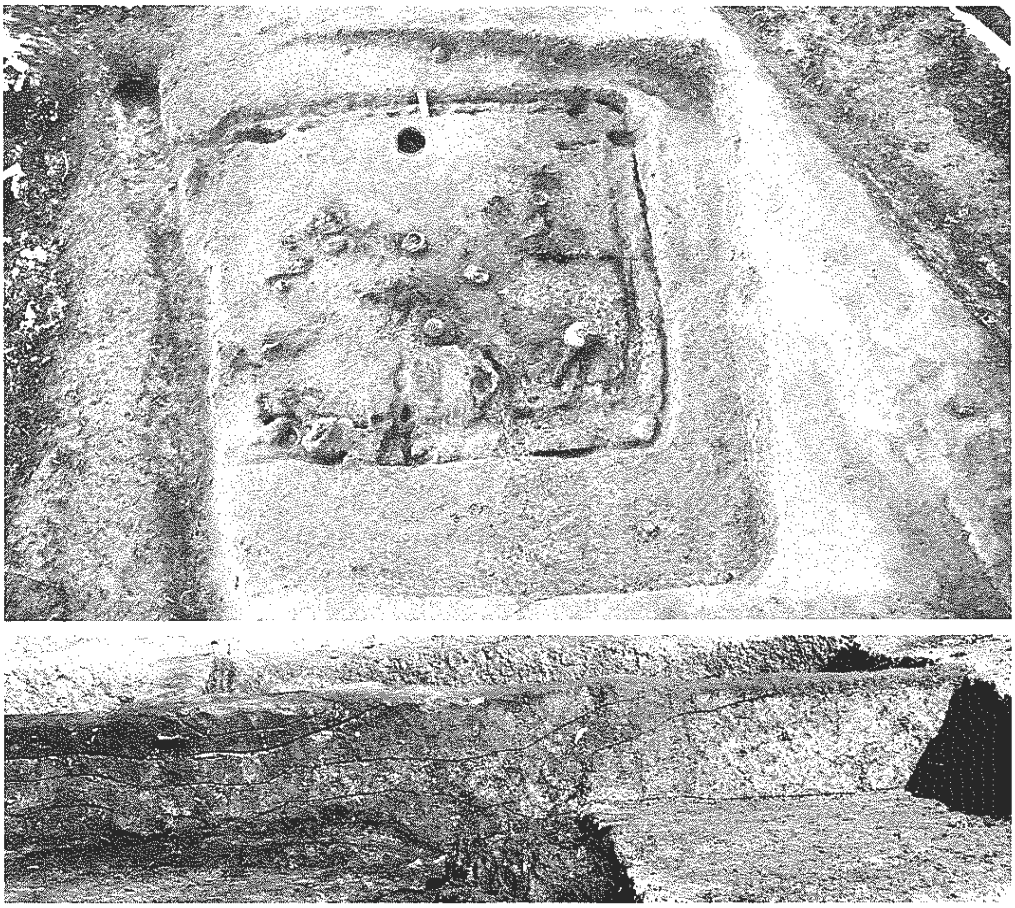
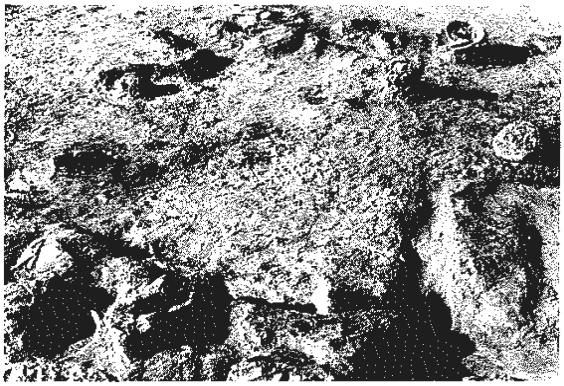
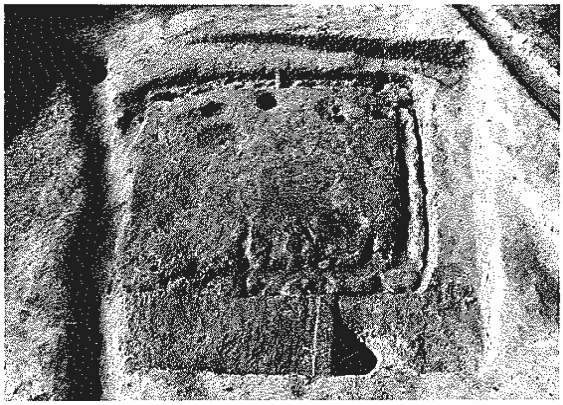


写真9　第49・50住居跡　上：遺物出土状況
下：住居廃絶後の状況（埋まり方）





上：第49住居跡遺物出土状況　中：第49・50住居跡全景

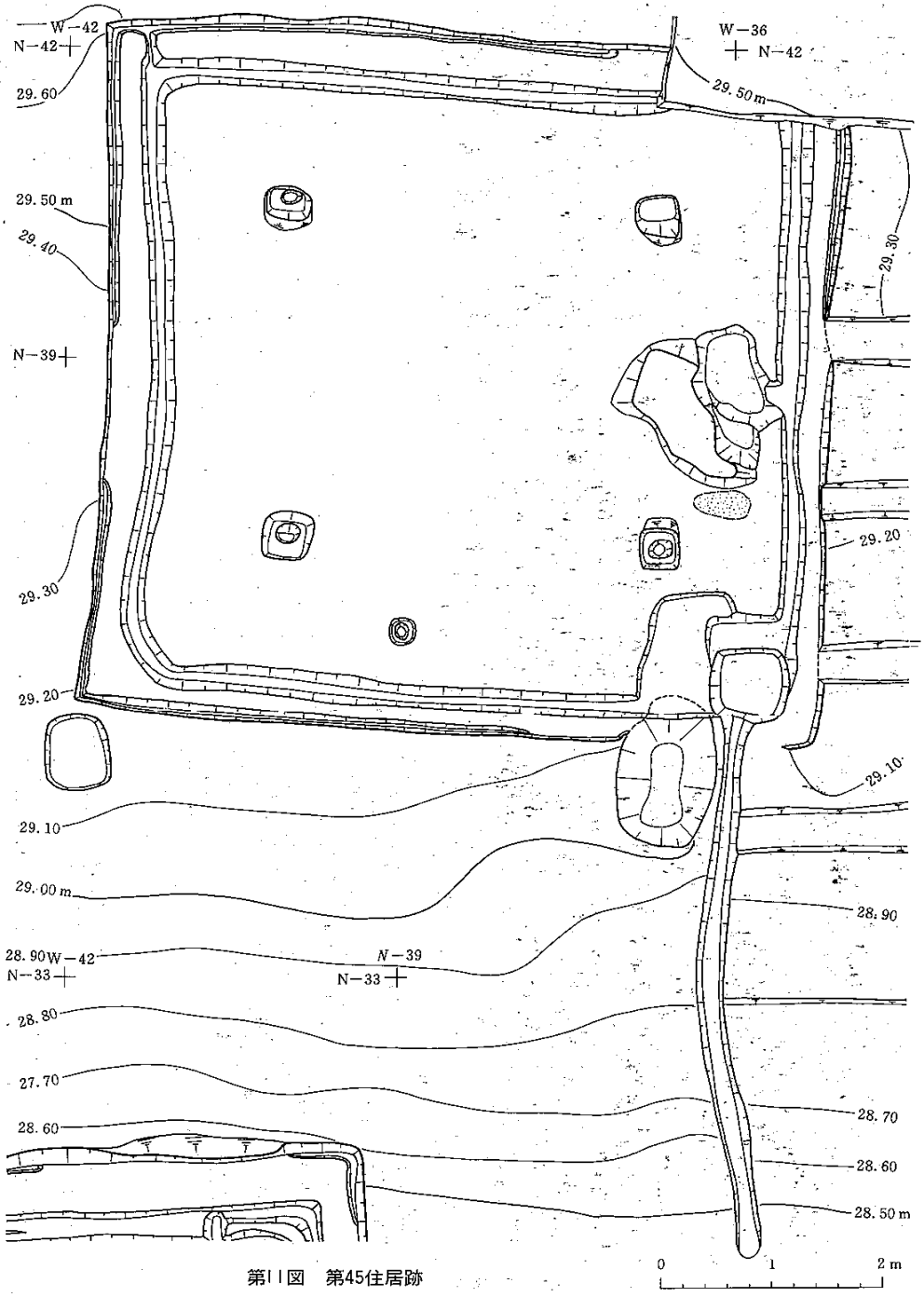
第５層（焼土，木炭層）：床面に水平に堆積し，焼土・木炭を多量に含み炭化した木材状の断片も認められる。
第６層（暗褐色粘土質シルト層）：有機質を多量に含む粘性の強い層で，床面に薄く貼りついている。

以上の層の中で，その成因を検討すると次のように考えられる。1. 第６層は生活をしている間に形成された層である。2. 第5層は火災等によって上部構造の焼け落ちたものである。3. 第1～4層は第５層堆積後壁ぎわから徐々に埋った層である。

（床面）ほぼ平担で固い。
（柱穴）４個あり，正方形の配列を示す。
（周溝）壁沿に２本の周溝がめぐっている。
（炉）検出されなかった。
（その他の施設）検出されなかった。
〔関連資料〕火災にあった住居跡（第40住居跡）。焼け落ちた木材が広がっている。

写真10　下：関連資料（第40住居跡の炭化材出土状況）

3．古墳時代中期の住居跡



第11図　第45住居跡

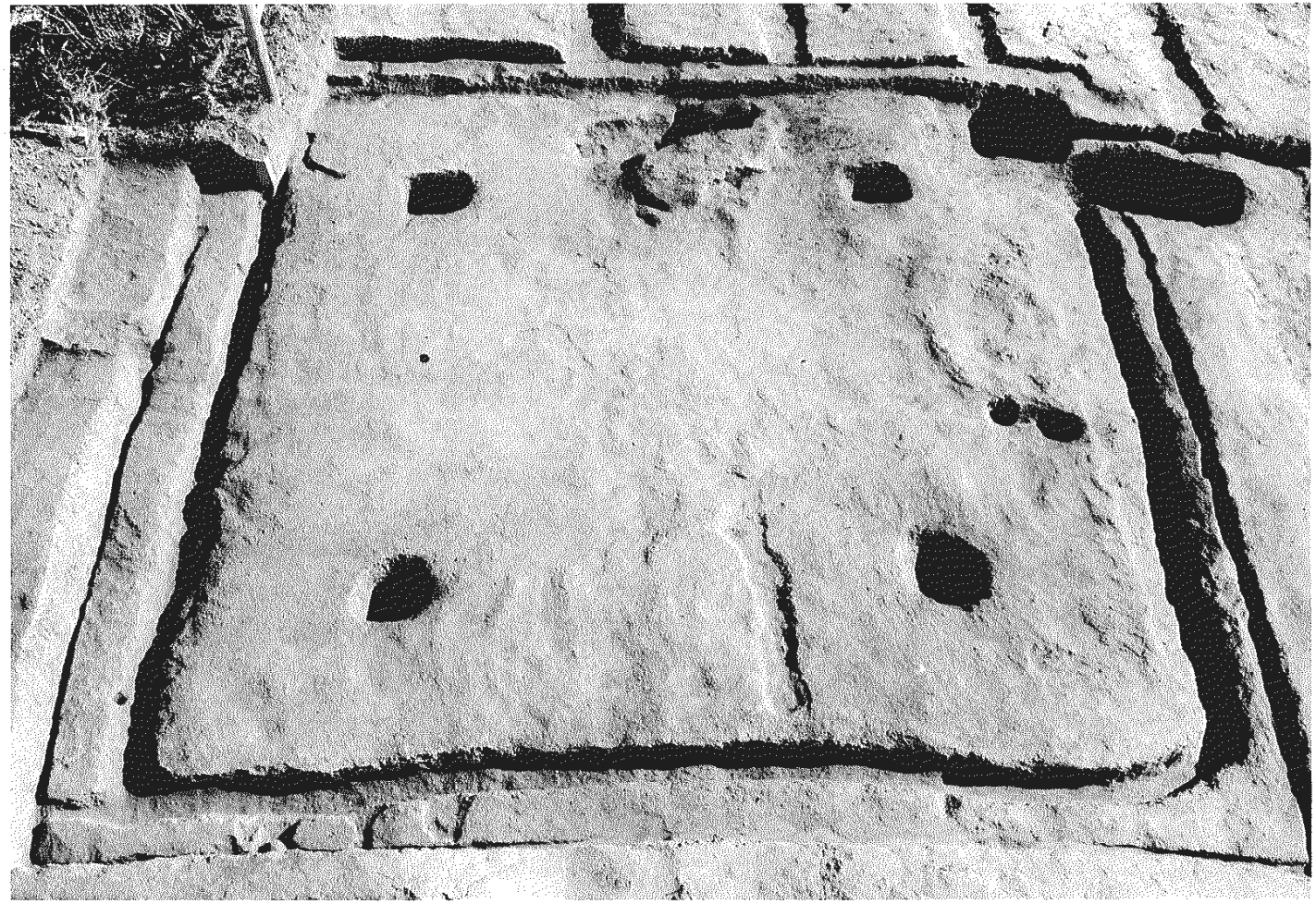


写真11　第45住居跡全景

第45住居跡

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）四隅が角張った正方形の住居跡で，規模は長軸6.7m・短軸6.45mである。長軸方向は北一南である。

（床面）床面は南側が僅かに低いがほぼ平担である。また，床面は叩きしめられたように固く堆積土との間に肌わかれの現象が認められる。

（柱穴）主柱穴と考えられるピットは4個ある。ピットの間隔は3.3mで正方形の配列を示す。

（周溝）壁沿いに2本の周溝がまわっている。壁に接する周溝は幅がせまくて浅い。この周溝は西壁の中央部と東壁の中央南側の部分で途切れている。内側の周溝は幅が広く深い。この周溝は途切れることなく全体をまわって貯蔵穴に接続する。この貯蔵穴は住居外にのびる溝（約5m検出）とも接続している。

（**炉またはカマド**）住居東辺の中央から僅かに南側に偏った部分が 25×50 ㎝の範囲で焼けている。この焼土面に関する上部構造及びその痕跡は検出されなかった。

（貯蔵穴）住居東南隅に隅丸正方形をしたピットがある。このピットは長・短軸とも70㎝，深さ40㎝の規模をもつ。堆積土は最下層が細砂を縞状に含んだ灰黄褐色の粘土層（この層は住居外にのびる溝の最下層に続いているので，その上は地山の土をブロック状に含んだ層である。

遺物の出土は少なく，ピット内堆積土の上部から一括土器が出土した程度である。

（その他の施設）住居東側の中央部に長楕円形の土壇（高さ10㎝）があり，その北側を抉るような状態でピットが掘り込まれている。この土壇は土を不規則に積んで作ったものである。

写真12　第45住居跡炉およびカマド周辺

第8住居跡

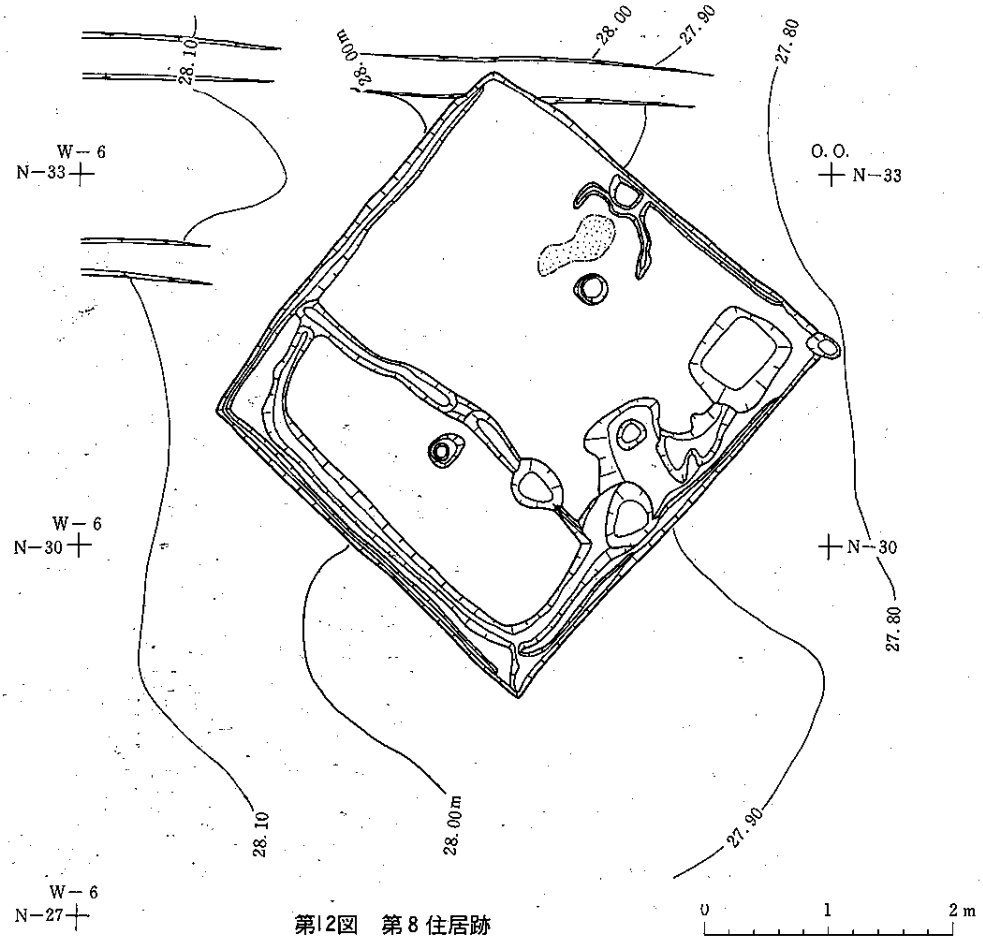
（重複・増改築）他の遺構との重複関係は認められない。増改築については住居の床面を横切る溝があるが，この点については「（周溝）」で述べる。

（平面形・方向）四隅が角張った正方形の住居跡で，規模は長軸3.60m・短軸3.40mである。非常に小規模な住居跡で，長軸の方向は北東―南西を示している。

（床面）ほぼ平担で，叩きしめられたように固い。堆積土との間に肌わかれの現象が認められる。

（柱穴）掘り方と柱痕跡を識別することができたピットは2個ある。この2つのピットは住居の長軸線上にならんでいる。この他に配列関係において規則性の認められるピットはない。このことから，第8住居跡は住居自体が極めて小規模なこと等も考えあわせると，他の住居のような4本主柱ではなく，長軸線上にならんで配列された2本主柱の可能性がある。

（周溝）壁沿に2本の周溝がまわっている。壁に接する周溝は幅がせまく，浅い。この周溝は北東壁の西側と東隅で途切れている他全域に認められる。内側の周溝は幅が広くて深い。この周溝は住居の南西側にみられるだけで北および東側にはのびていない。また，この幅広い周溝

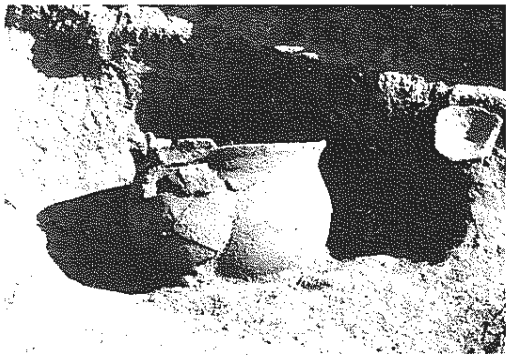


第12図　第8住居跡

は南西壁に平行して住居床面を横切る溝と接続している。床面を横切る溝については次の2つの考えが成り立つ。1. この溝は住居構築時に壁に接する周溝として掘られたものであり，住居が拡張される前の姿を示すものである。2. この溝は住居の構造に関係するものである。今回の調査ではこの2つの考えのどちらかに決定しうる積極的な根拠は認められなかった。

（**炉**）住居北東壁の中央から僅かに内側の床面が焼けている。形はゆがんだ楕円状をしておりその広がりは長軸70㎝・短軸35㎝である。焼け面の三方を囲むように細い溝が掘られている。

（貯蔵穴）住居東隅には長軸80㎝・短軸65㎝・深さ28㎝の規模をもつ長方形のピットがある。このピットの長軸は住居の長軸方向と一致している。床面からの立ちあがりはゆるやかであるが，ピットの壁自体はかなり急角度を示している。堆積土を観察すると下層には黄褐色や灰黄色をした粘土と砂が縞状に小単位で混じりあった層があり，上層には黄褐色のシルト層がある。埋まり方は将棋倒し状を示さず，水平堆積に近い状態を示している。この事はピットの底部に水が溜っていたことを示している。出土遺物はいずれも細片でまとまったものはない。



（その他の施設）住居東南壁の中央部にほぼ接する形で楕円形のピットがある。規模は長軸55㎝・短軸32㎝・深さ30㎝である。このピットからは底面には接していないが，壁面に接した状態で完形に近い甕が，1点出土している。

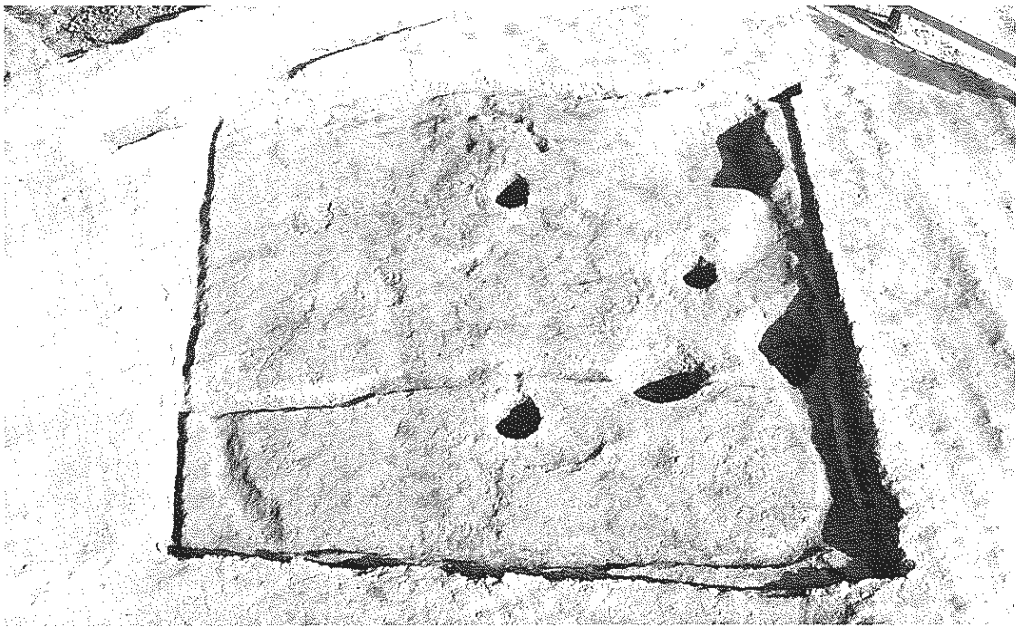
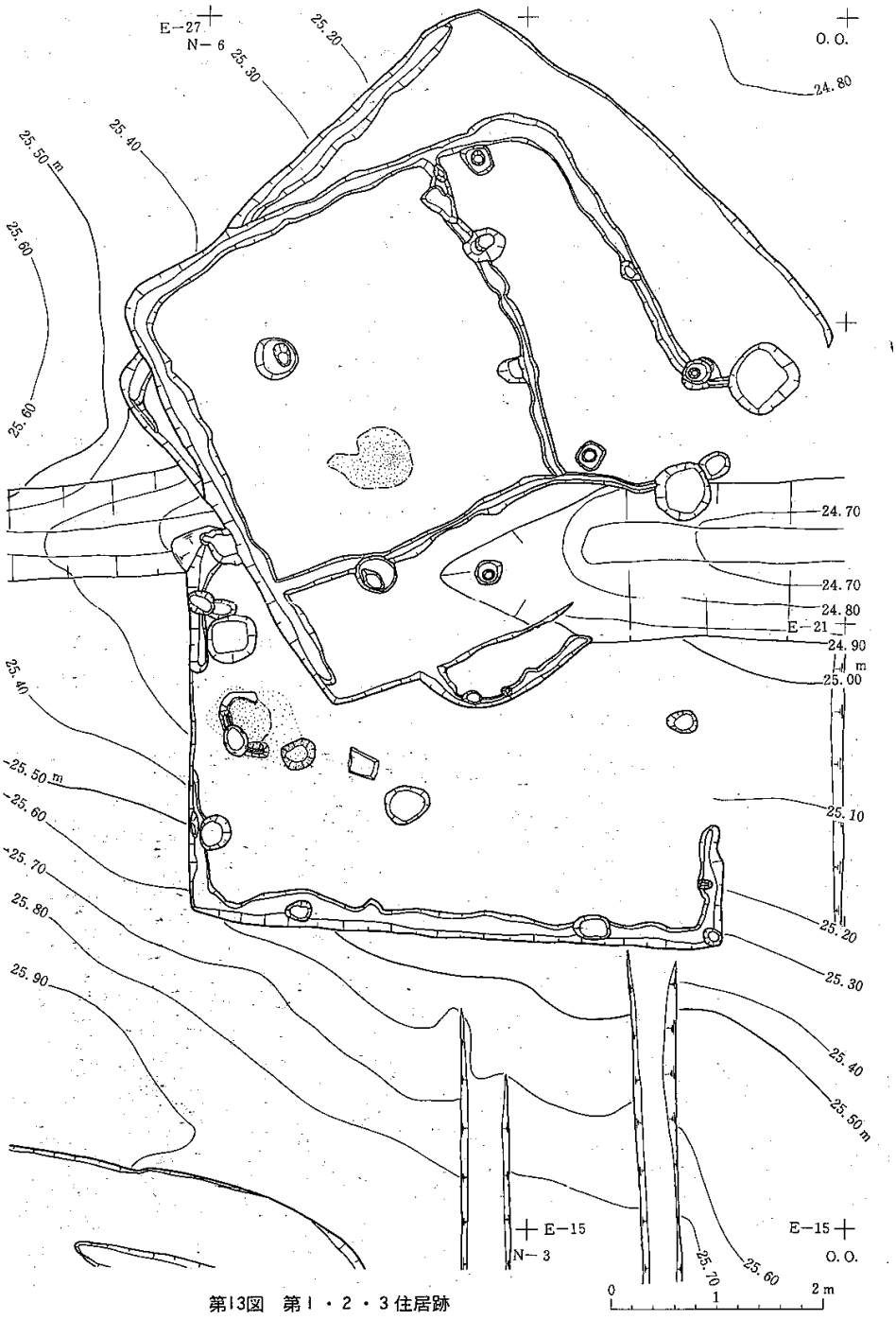


写真13　第8住居跡　上：遺物出土状況
下：全景



第13図　第1・2・3住居跡

第3住居跡

（重複・増改築）第3住居跡は第1・第2住居跡，南北に走る溝と重複しており，次のような関係が認められる。第1住居跡が埋まる──→第2住居跡が構築される──→第2住居跡が埋まる──→第3住居跡が構築される──→第1～3住居跡の一部を溝が削る。

（平面形・方向）住居の東側が後世の溝によって削りとられているが，残存部から推定すると正方形と考えられる。規模は南北軸が4.90m，東西軸の残存部が3.15mである。

（床面）ほぼ平担である。第1・第2住居跡の重複部分には明瞭な貼り床が観察される。

（柱穴）ピットは幾つか検出されているが主柱穴と推定できるものはない。

（周溝）北壁沿いの一部で途切れている他は，全域にまわっている。

（**炉またはカマド**）住居の北壁に近い床面が40×35㎝の範囲で赤褐色に焼けている。そのまわりには「コ」の字状をした黄色粘土の分布が見られ，北側と西側の一部が堤状に高くなっている。側壁も赤褐色に焼けている。焼土面とそれを取囲む黄色粘土の下には構築時の掘り方が認められる。この施設が火を焚いたものであることは疑いない。さらに，粘土を使った何らかの上部構造があった可能性が強い。しかし，形状が不明瞭なこと，壁から幾分離れていることなどから，カマドとするには未だ検討の余地を残している。

（貯蔵穴）不明。

（その他の施設）床面の中央から僅かに北寄りの部分に平担な磨面をもつ石がある。この石は床面下に深く埋っているが，埋設した際の掘り方を検出することができなかった。したがって「台石」としての決め手には欠けるが可能性は否定できない。

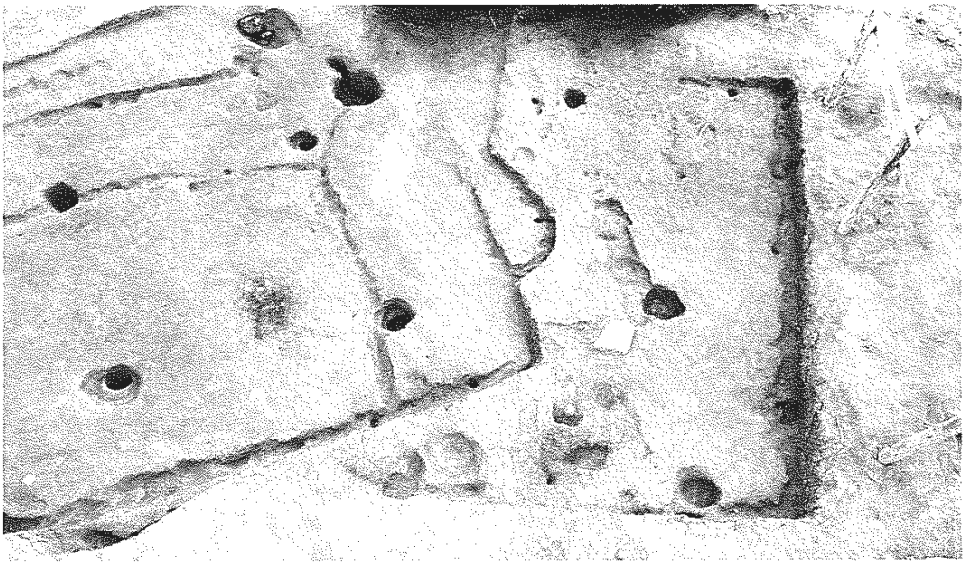
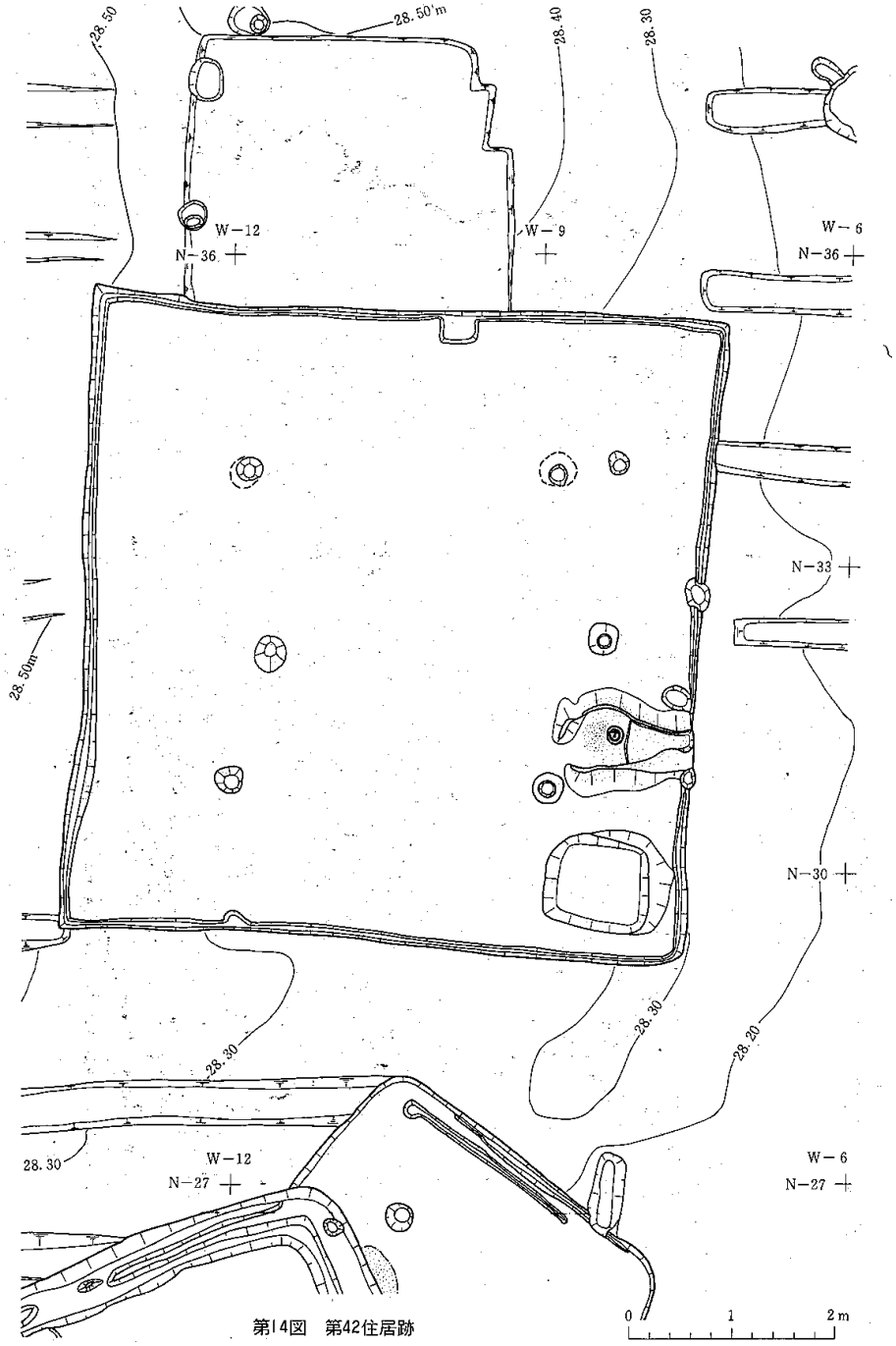


写真14　第3住居跡と第12住居跡の一部


28.50
28.50'm
28.40
28.30
W−12
N−36
W−9
W−6
N−36
N−33
28.50m
N−30
28.30
28.30
28.20
28.30
W−12
N−27
W−6
N−27
0
1
2m

第14図　第42住居跡

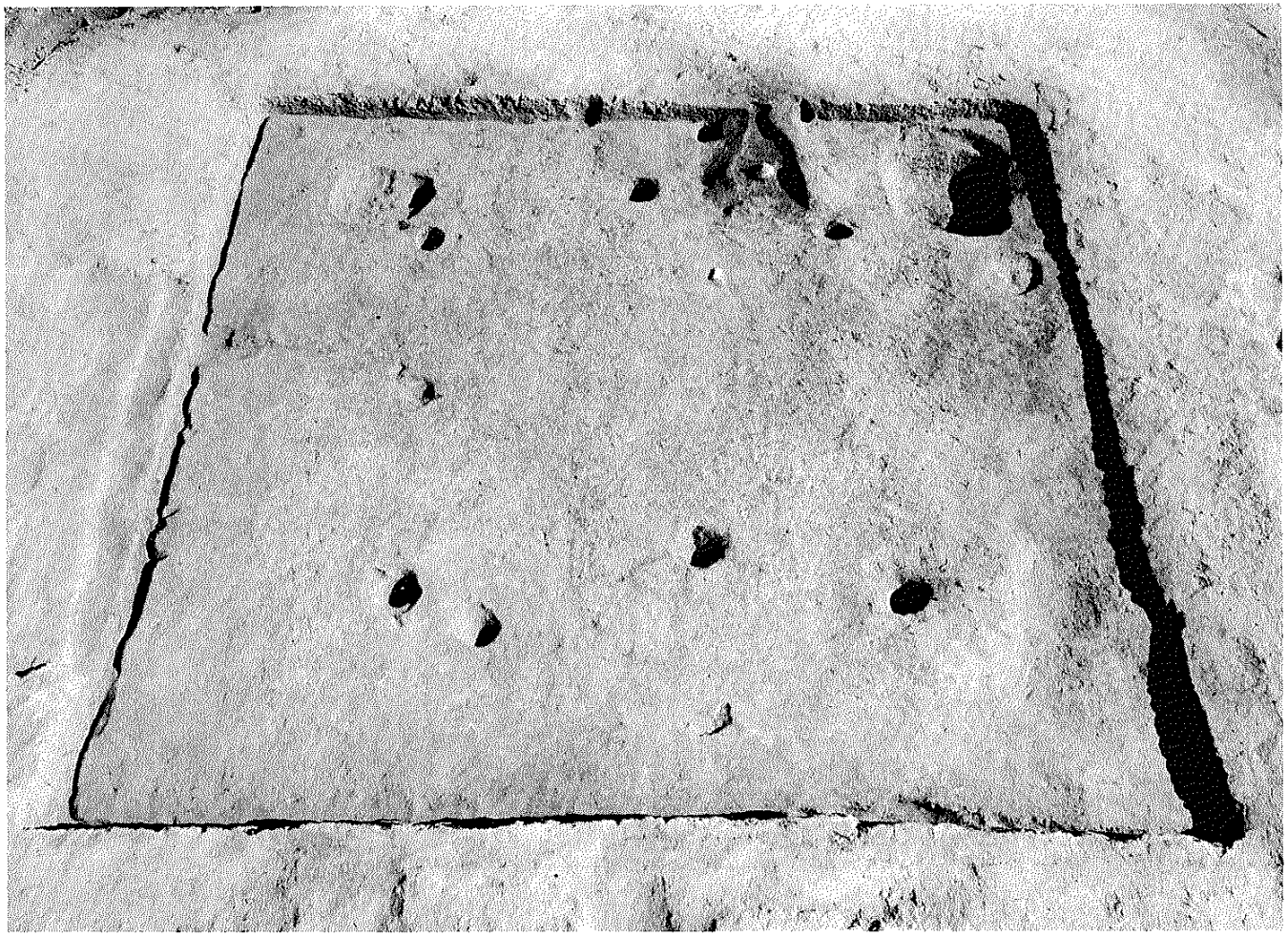
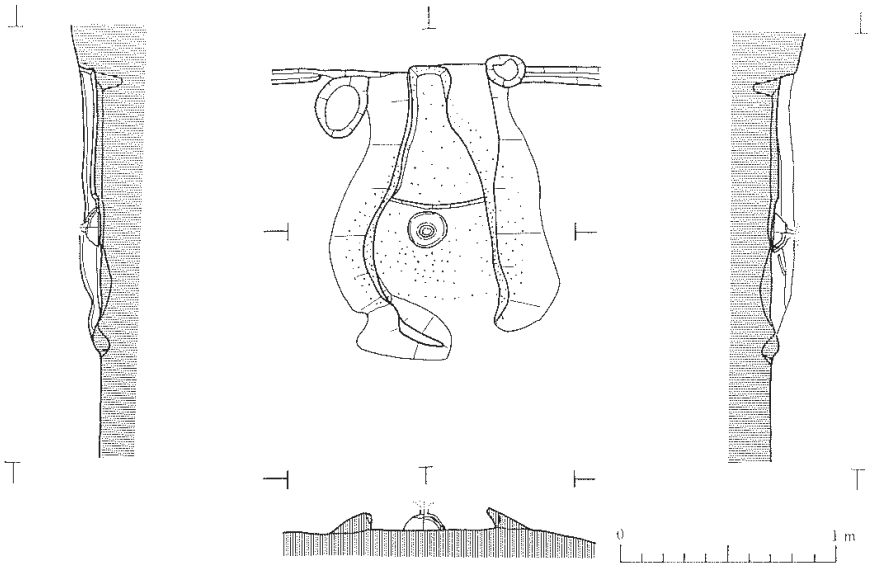
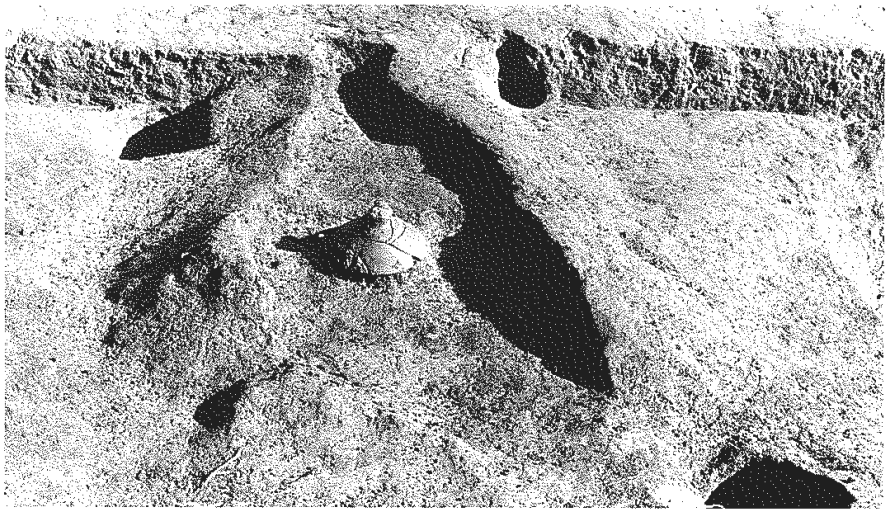


写真15　第42住居跡全景



第15図　第42住居跡カマド



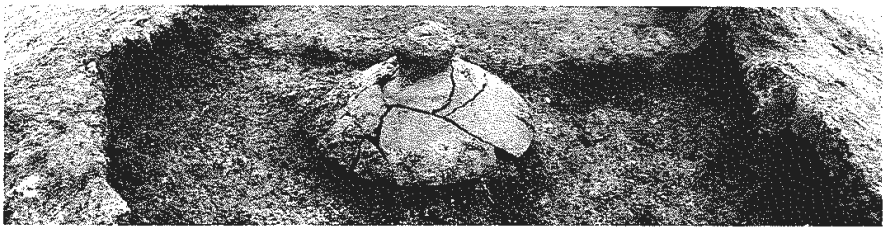


写真16　第42住居跡カマド　上：全景
下：支脚（高坏の転用）の状態

第42住居跡

（重複・増改築）認められない。

（平面形・方向）四隅が角張った正方形の住居跡で，規模は長軸6.00m・短軸5.85mである。長軸方向は東一西である。

（床面）東側が幾分低いがほぼ平坦である。床面には明瞭な貼り床は行なわれていないが叩きしめられたように固い。堆積土との間に肌わかれの現象が認められる。

（柱穴）主柱穴と考えられるピットは4個あり，そのうち2個については床面を剥がした段階で掘り方が検出された。部分的な貼り床の存在を示している。この4個の柱穴は間隔が3.00mで，正方形の配置関係を示している。

（周溝）壁に沿って幅のせまい周溝がまわっている。この周溝はカマドの部分で途切れている。

（**カマド**）住居東壁中央の僅か南寄りの部分につくりつけられている。このカマドは粘土を積み重ねて構築している。全長1.37m・幅1.10m・残存高10㎝の規模をもつ。天井部が崩落しているが，構造的には焚き口部・燃焼部・煙道部・煙り出し部からなる。燃焼部の幅が最も広く，煙り出し部に向うに従ってすぼまる形をしている。燃焼部には坏および高坏を転用した支脚がある。燃焼部側壁の立ちあがり角度が内面46°外面25°であること，残存高が10㎝であること等から低い構造のカマドであったと推定される。使用状況を観察すると燃焼部は底面・側壁とも赤褐色に焼けているが，煙道部・煙り出し部では暗赤褐色に黒ずんだ焼け方をしている。

（貯蔵穴）住居東南隅に位置している。長軸100㎝・短軸90㎝・深さ30㎝の規模をもち，長軸方向は住居方向に一致する。埋まり方を検討すると水平に近い層の堆積が認められる。

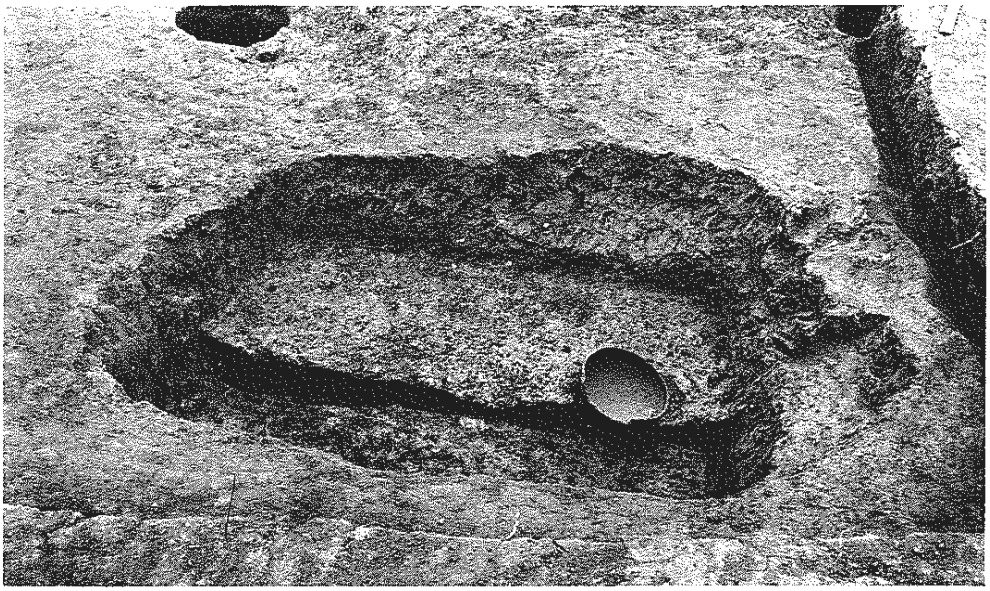


写真17　貯蔵穴状ピットと遺物の出土状況

第25住居跡

（重複・増改築）第25住居跡は第51・第26住居跡が埋った後で構築されている。

（平面形・方向）長軸6.05m・短軸5.75m，の規模をもつ正方形の住居跡。長軸は北東―南西。

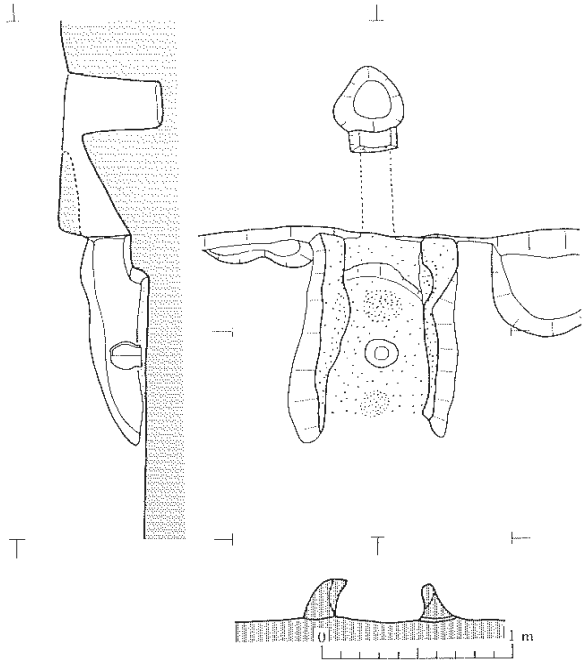
（床面）多少の凹凸はあるが平担で固い。堆積土との間に肌わかれの現象が認められる。

（柱穴）主柱穴と考えられるピットは4個ある。ピットの間隔は2.70mで正方形の配列を示す。

（周溝）壁に沿って幅のせまい周溝がまわっている。この周溝はカマド周辺で途切れている。

（**カマド**）全長2.20m・最大幅86㎝のカマドが住居北西壁の中央につくりつけられている。構造的には焚き口部・燃焼部・煙道部・煙り出し部からなる。燃焼部は粘土を積みあげて構築し底面中央に甕を転用した支脚がある。側壁の立ちあがり角度は内面82～90°・外面70～75°である。煙道部の住居外に延びた部分は地山を掘り抜いている。使用状況を観察すると，燃焼部底面・側壁は赤褐色に焼けているが，煙道部では暗赤褐色に黒ずんだ焼け方をしている。

（その他の施設）住居南東壁に沿って，楕円ないしは隅丸長方形をした大形のピットが3個ある。この他に，床面から敲石・両端に敲打痕のある砥石・石製模造品の素材等が出土している。



第16図　第25住居跡カマド

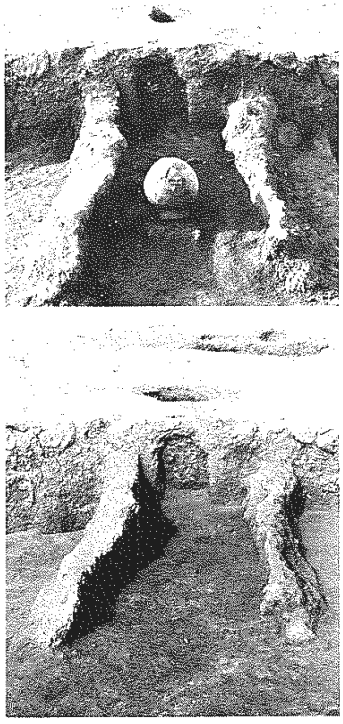
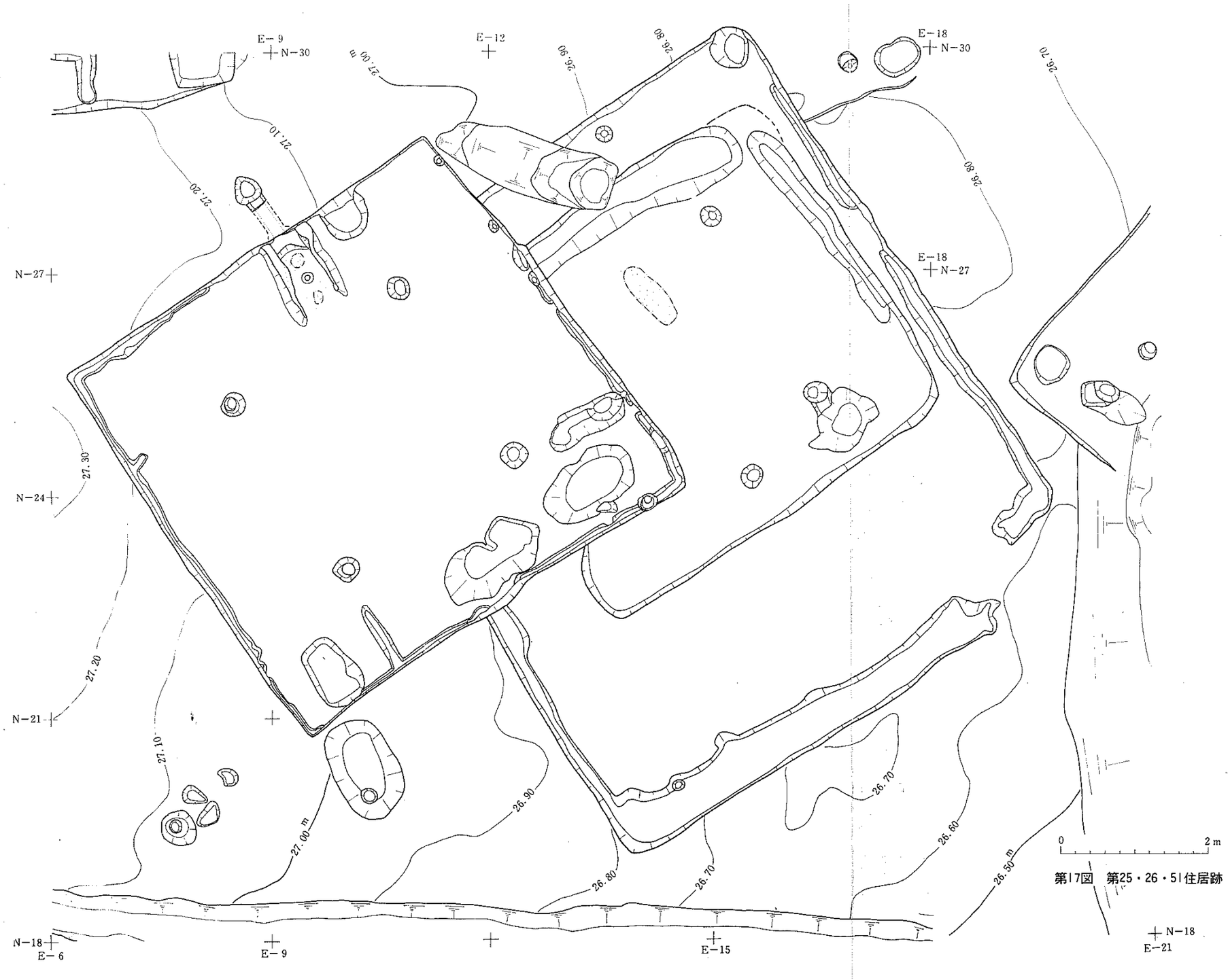


写真18　第25住居跡カマド
上：最終使用時
下：構築段階



第17図　第25・26・51住居跡

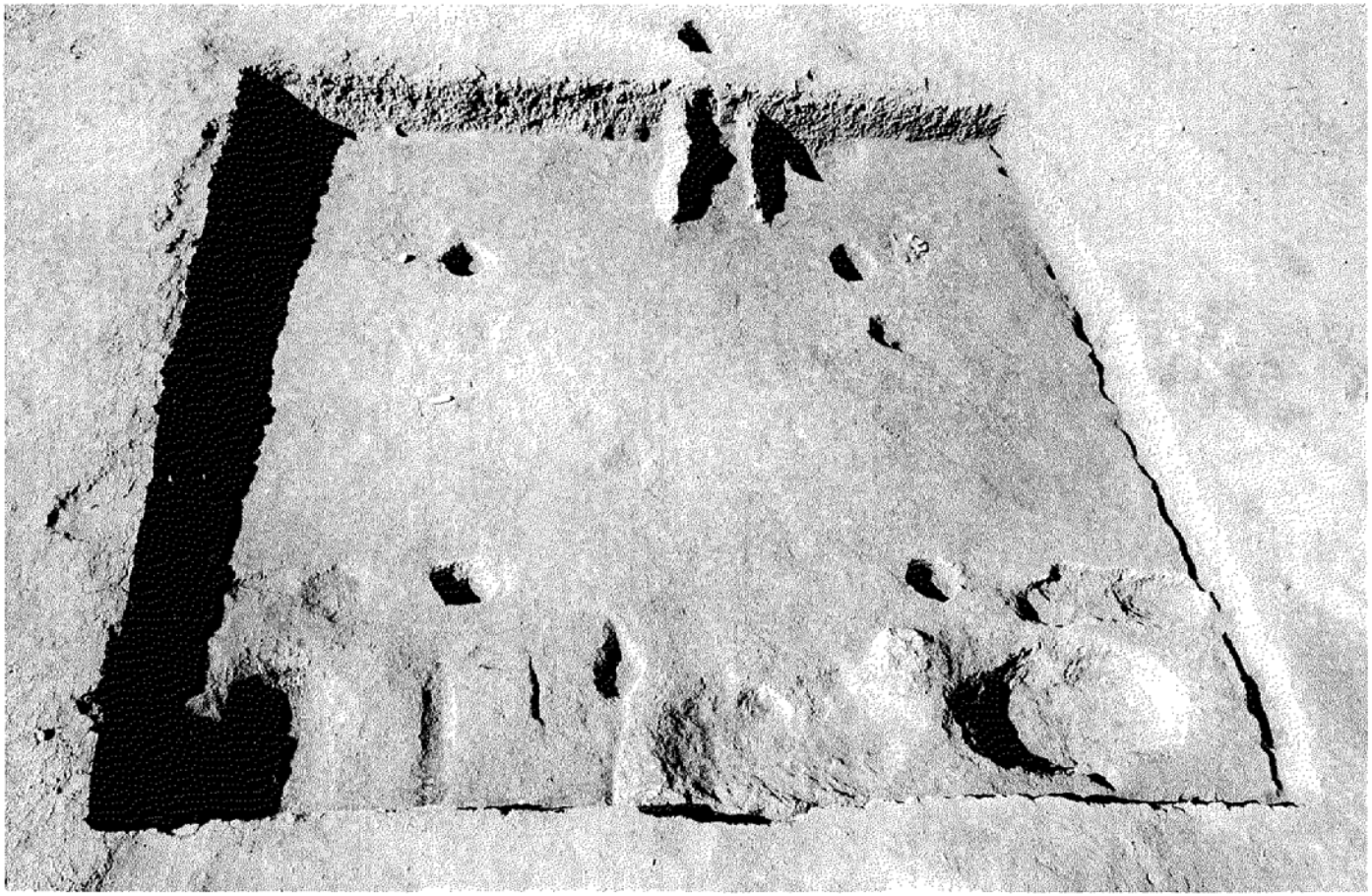
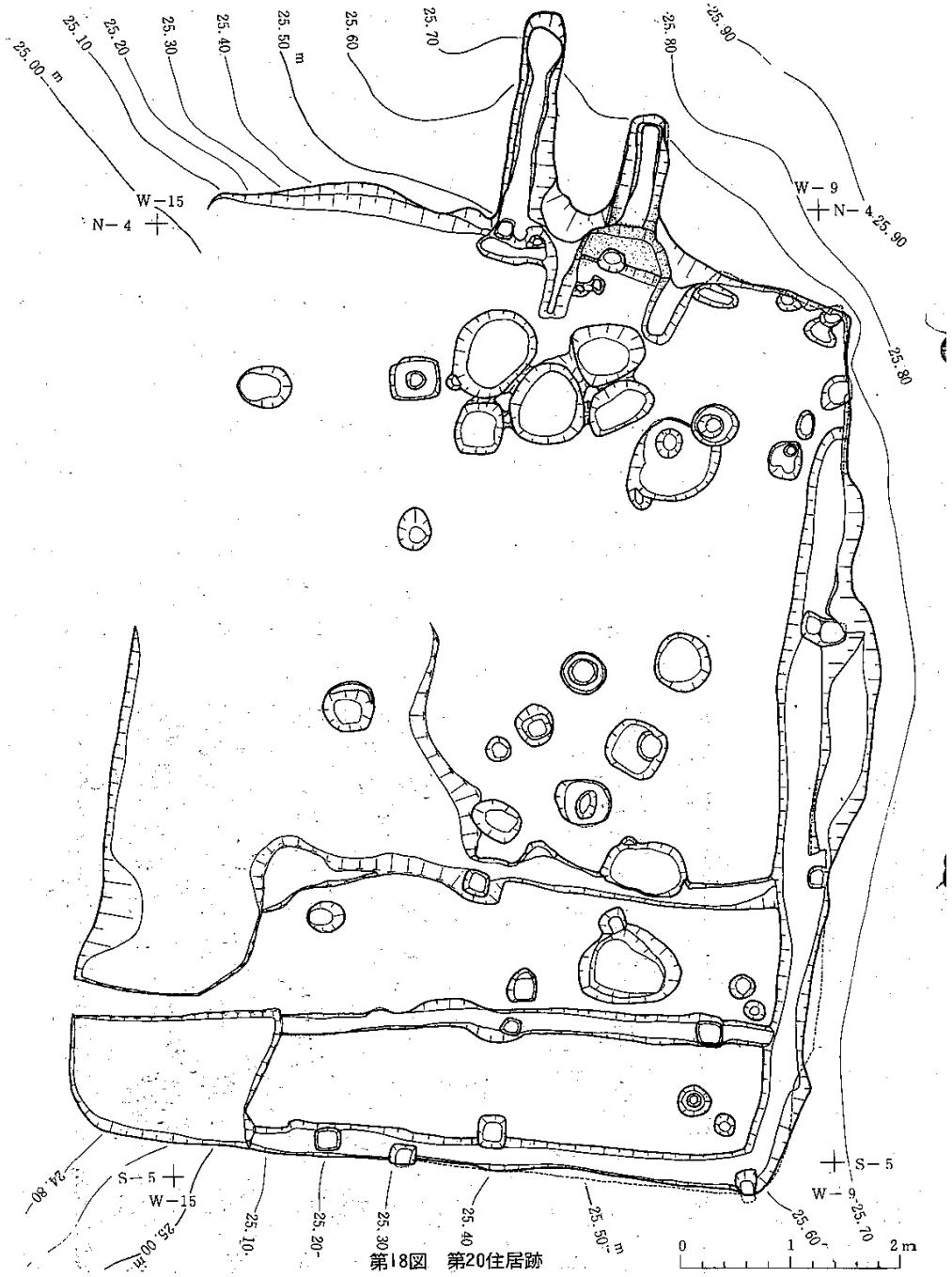


写真19　第25住居跡全景

4. 奈良・平安時代の住居跡



第18図　第20住居跡

第20住居跡

（重複・増改築）住居跡床面で，南壁に平行な周溝と思われる2本の溝と多数の柱穴が検出され，その配列関係から2回の増改築が行なわれたものと推定される。

（平面形・方向）増築前の規模は長軸5.80m，1回目の増築で長軸6.90mと規模を増し，最終時には長軸8.90m，短軸6.70mの規模になる。長軸は北―南であり，平面形は長方形である。

（床面）西に傾斜する斜面に構築されているため，東半分は砂質の地山を掘り込んで床面を構築し，西半分は遺物包含層の黒褐色土を掘り下げ，東半分の床面と同じ高さまで明褐色土を埋めてほぼ水平な床面を造っている。

（柱穴）41個のピットが検出されている。ピットの配置状態・形態・柱痕跡の有無から，増築後も基本的には，4 個の主柱穴の配置が考えられる。また，壁に接して周溝中にも柱穴が検出され，補助的な柱の存在が推定される。

（**周溝**）南壁に平行な2本の溝が検出された。内側の溝は増築以前の周溝と考えられる。東壁に沿う周溝は北東隅の手前で途切れ，北壁まで及んでいない。西壁は削平されてしまっており，周溝の有無は不明である。周溝は壁下半を外側にえぐるように掘っている。

（カマド）新・旧2基のカマドが検出された。古いカマドは煙道部のみが残っており，幅30～40㎝長さ215㎝の規模を持ち，煙り出しの深さが59㎝という長大なものである。新しいカマドはこの東側にある。煙焼部の巾が130㎝，長さが100㎝で，側壁は粘土で構築されている。煙道部は幅35～40㎝，長さ110㎝，煙り出し部の深さは33㎝である。

写真20　第20住居跡全景

第21住居跡

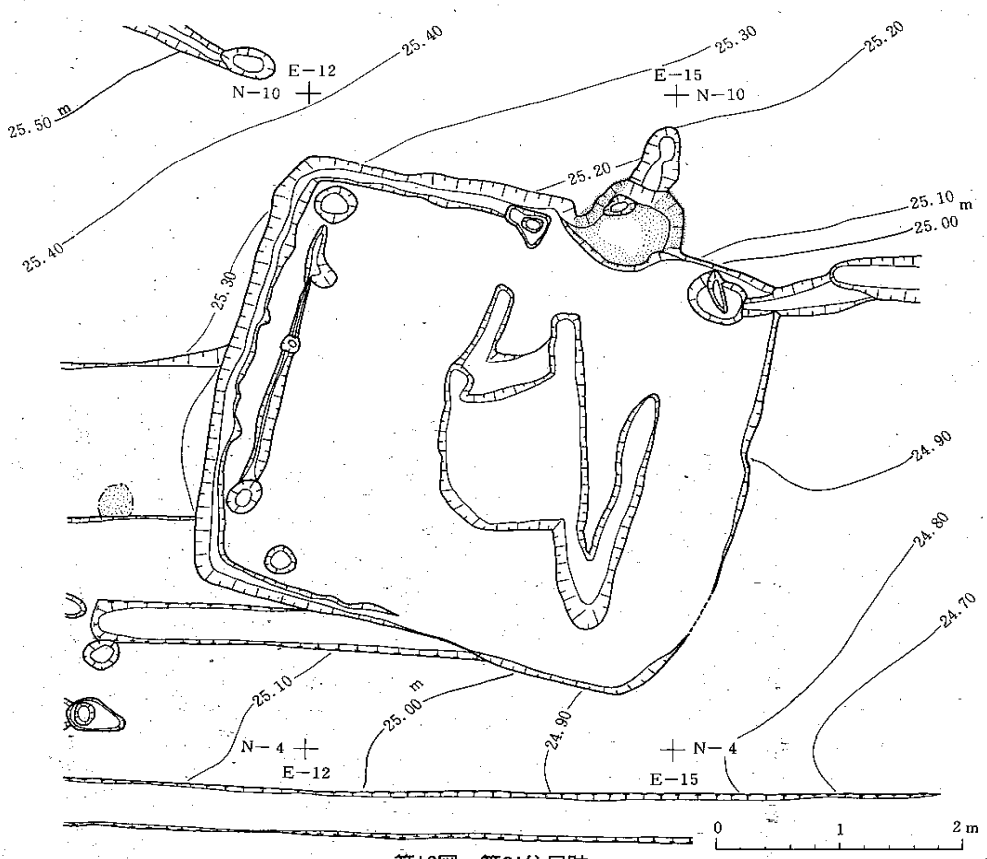
（重複・増改築）第22・第23住居跡と重複している。第22・第23住居跡が廃絶されて埋った後第21住居跡がつくられている。第22住居跡と第23住居跡の新・旧関係は不明である。増・改築した痕跡は認められない。

（平面形・方向）長軸4.40m・短軸4.20mで，長軸方向は北―南である。平面形は隅丸正方形である。

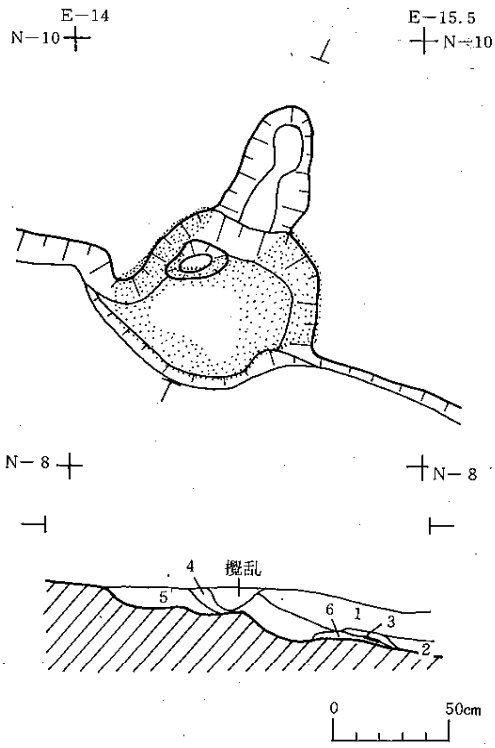
（床面）床面中央部の¼ほどが，後世の攪乱によって破壊されている。東側が西側より若干低くなっているが，ほぼ平坦である。

（柱穴）床面上からは，計6個のピットが検出されている。しかし配列状態に規則性がなく，掘り方と柱痕跡の区別がつくものがない。したがって柱穴は不明である。

（周溝）幅20～30㎝の周溝がカマドの西側から北壁・西壁に沿ってまわり，南壁の西半分のところで途切れている。この他に周溝の内側に幅10～15㎝の溝が、西壁と平行に掘られている。



第19図　第21住居跡



第20図　第21住居跡カマド

（カマド）燃焼部と煙道部を，住居の外に掘り抜いて構築したカマドである。北壁の中央から若干，東寄りに位置している。燃焼部は幅80㎝・長さ75㎝の規模をもち，底面は焼けて固くなっている。側壁も残存部の上部が固く焼けている。煙道部は幅35㎝・長さ60㎝の規模をもつ。

カマド堆積土は2層に大別される。

第1層（№1～№5層）：暗褐色（10YR3/4）層で，炭化物・焼土の多少により5層に細分できる。№1 層―暗褐色粘土質シルト層で，炭化物・焼土を含有している。№.2層―暗褐色粘土質シルト層で，焼土・炭化物を№1 層よりも多く含有している。№3 層―暗褐色粘土質シルト層で，固く焼けた焼土塊を含有している。№4 層―暗褐色粘土質シルト層で，焼土を多量に含有している。№5 層―暗褐色粘土質シルト層で，№4 層より若干明度を増すが，焼土の含有量は少ない。

第2層（№6層）：明褐色（7.5YR5/8）シルト質砂層で手でさわるとさらさらしている。

写真21　第21住居跡全景

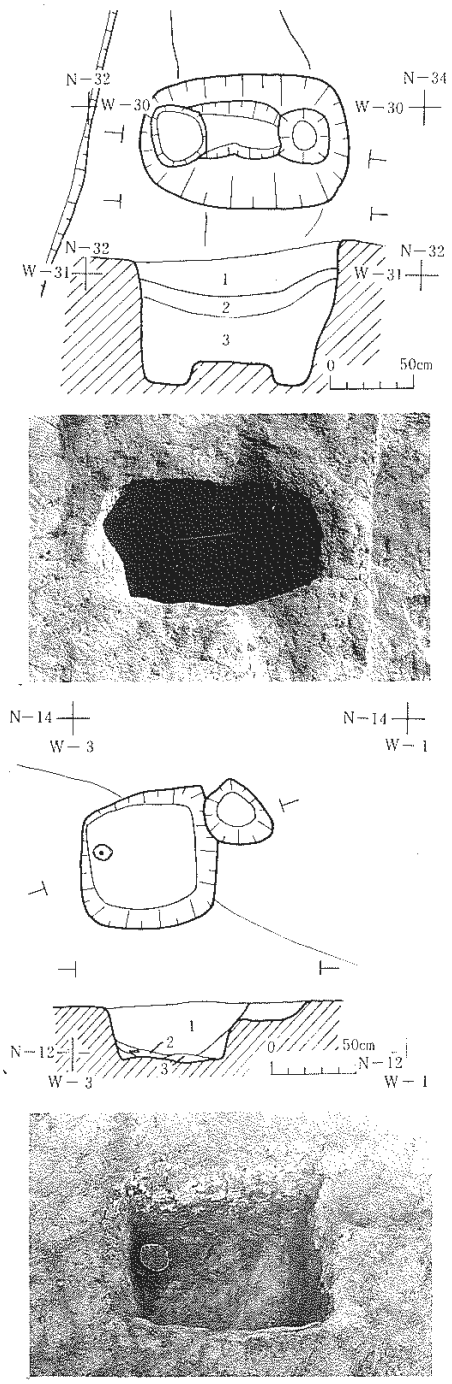


写真22　上：第3土坑
下：第5土坑

5. 土坑

土坑計 6 基検出されている。平面形は隅丸長方形・隅丸正方形・長楕円形・楕円形等さまざまである。長軸の長さも1.4〜0.7mの間にあり，規模はまちまちである。これらの土坑 形態等から同一の性格・機能を有していたとは考えにくい。第 4・第 5 土坑，堆積土中から比較的まとまった土師器が出土しており，形態からも竪穴住居跡の壁や床面が削平されて残った貯蔵穴と考えられる。第2土坑 第45住居跡との切り合い関係から，同住居跡より古い。この他の土坑は性格，年代等は明らかでない。

第3土坑

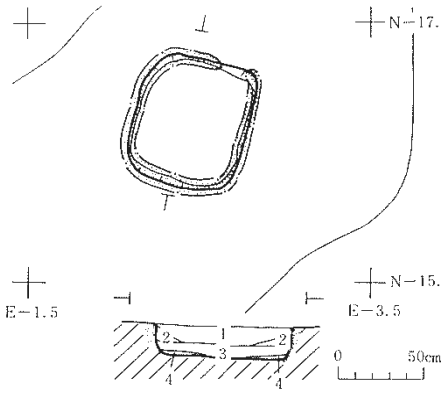
（平面形・方向）隅丸方形の平面形で，長軸 0.7 m・短軸0.6mあり，長軸方向は北一南である。

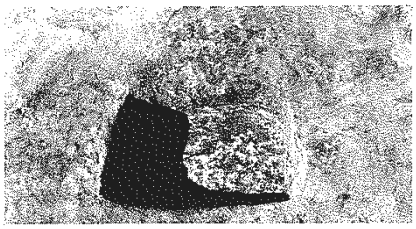
（堆積土）基本的には同質の土層であるが，含有物によって3層に細分できる。層№1：褐色（10YR4/6）粘土質シルト層，層№2：褐色（10YR4/6）粘土質シルト層で，黒色（10YR2/1）の細砂ブロックを斑状に含有している。層№3：褐色（10YR4/6）の粘土質シルト層で，黒色（10YR2/1）の細砂ブロック，浅黄色（10YR7/4）砂質粘土ブロックを斑状に含有し，どの層も中央部が凹む堆積をしている。

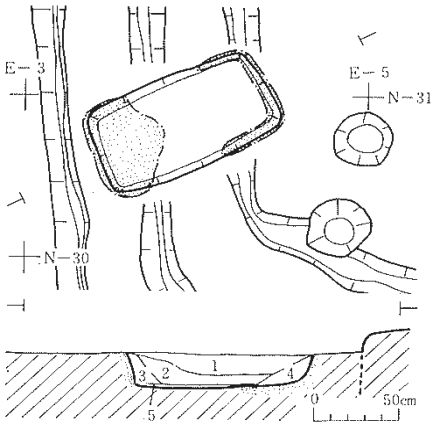
第5土坑

（平面形・方向）平面形は隅丸正方形・長軸 1.0 m・短軸0.6mあり，長軸方向は東一西である。

（堆積土）層№1：褐色（10YR4/4）粘土質シルト層，焼土を極く微量に含有している。層№2：黄褐色（10YR5/6）砂質粘土層，層№3：灰黄褐色（10YR5/2）粘土層である。層№1からは，高坏坏部や甕口縁部破片等が出土している。







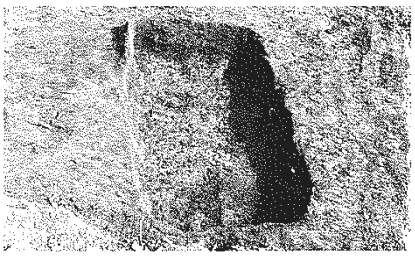


写真23　上：第４焼土遺構
下：第８焼土遺構

6．焼土遺構

焼土遺構は８基検出されている。平面形は長方形・長楕円形・隅丸長方形等がある。規模は長軸0.7～1.4mといろいろである。側壁や底面が焼けており，特に側壁は著しい。したがって，この遺構は火の使用が明らかである。遺構に伴う遺物の出土は全くなく，その年代や性格等については未検討のため不明である。

第４焼土遺構

（平面形・方向）隅丸長方形で，長軸0.8m・短軸0.5mである。長軸方向は北―南である。

（堆積土）基本的には同一の層と思われるが、細分すると４層に分かれる。層№1：褐色の砂質シルト。層№2：褐色をしており，粗い焼土粒を含んだ層。層№3：炭化物を多量に含んだ層。層№4：焼土層。

（使用状況）この遺構は側壁がかなりの火熱を受けて焼けているが，底面は焼けていない。

第８焼土遺構

（平面形・方向）長方形をしており，長軸1.1m，短軸0.6mで，長軸方向は北東―南西である。

（重複）第30住居跡の堆積土を掘り込んで作っており，第30住居跡より新しいことが判明した。

（堆積土）基本的には同一の層と思われるが，細分すると５層に分かれる。層№1：褐色のシルトで，少量の炭化物を含む。層№2：暗褐色のシルトで炭化物を多量に含む。層№3：暗赤色のシルトで，焼土を多量に含む。層№4：暗赤色のシルトで，焼土を多量に含み，焼土塊も多く含む。層№5：暗褐色のシルトで，層№2より炭化物を多く含む。

（使用状況）使用側壁と底面の一部が焼けている。

7. 溝

丘陵の平担面や緩斜面上から円形・「コ」の字状・直線状の溝が検出されている。

第1円形周溝：南側に張り出した緩斜面の東側に位置している。東側は斜面のため削られてしまっているが残っている部分から直径約 6.0mの円形をなすものと推定される。この溝は断面が「V」字状で，中には黒褐色ないし暗褐色のサラサラしたシルトが堆積していた。なお，この第1円形周溝は第16住居跡と重複しており，第16住居跡が埋った後で掘られたものである。

「コ」の字状溝：第1円形周溝の外側に，それを包みこむ形で「コ」字状の溝が検出された。南北軸が約20㎝ある大規模なもので，溝の断面は浅い皿状をしている。中にはサラサラした黒褐色シルト層が堆積している。この溝は第13住居跡・第18住居跡と重複しており，両者が埋った後で掘られたものである。

直線状の溝：丘陵平担面に東西と南北に走る溝が検出された。東西に走る溝は壁が急角度で立ちあがり，中にはサラサラした黒褐色シルトが堆積している。南北に走る溝は壁の立ちあがりがゆるやかで，浅い皿状をしている。溝の北側にはサラサラした黒褐色シルト層が堆積しているが，南側には暗褐色のシルト層が堆積している。また，東西に走る溝は第10・第50住居跡，南北に走る溝は第5・第37・第1〜3住居跡と重複しており，両者とも住居が埋った段階で掘られたものである。

以上の溝については性格が明らかでない。いずれも古墳時代前期の住居跡の上から掘り込んでいるので，時期的にはそれらより新しい。しかし，下限については不明である。

写真24　第1円形周溝

8．遺物包含層

分布：丘陵の南側斜面から谷にかけて遺物包含層の存在が確認された。遺物包含層は緩斜面では薄いが，谷に向うに従って厚くなる。その堆積は将棋倒し状である。この中で最も古い層は緩斜面にあり，その層を掘りこんで古墳時代中期（第 48 住居跡）や奈良、平安時代（第 20 住居跡）の住居跡がつくられている。そして，最も新しい層は谷の中央部に堆積している。

層の状態：層序を観察すると，表土から地山まで 5 層に大別できる。第 1 層は暗褐色土層群，第 2 層は黒褐色土層群，第 3 層は暗褐色土層群，第 4 層は褐色土層群，第 5 層は褐色土層群である。そのうち第 2 層から第 4 層までが古代の遺物包含層である。その土性を観察すると，下の層になるに従ってしまり，粘性とも増す傾向があるが，層ごとにそれほどの相違はない。また各層とも微粒状に焼土と炭化物を混入している。第 4 層には，地山が崩壊してできたと思われるブロック状の堆積物が混入している。

出土遺物：遺物の出土状況に規則性，方向性は観察されない。また，第 2 層から第 4 層まで層ごとの遺物の相違はない。谷の部分では，弥生式土器，土師器，須恵器などの破片が混在している。

成因と性格：遺物包含層から出土した遺物は台地上に住居を営んで生活していた人々が使用後直接投げすてたものか，あるいは台地上から風や雨などの自然の力によって流れ込んだものか明らかでない。したがって，丘陵の平坦面や斜面に居住していた人々が遺物包含層の形成に対しどのような関わり方を示していたのか明確にすることができなかった。

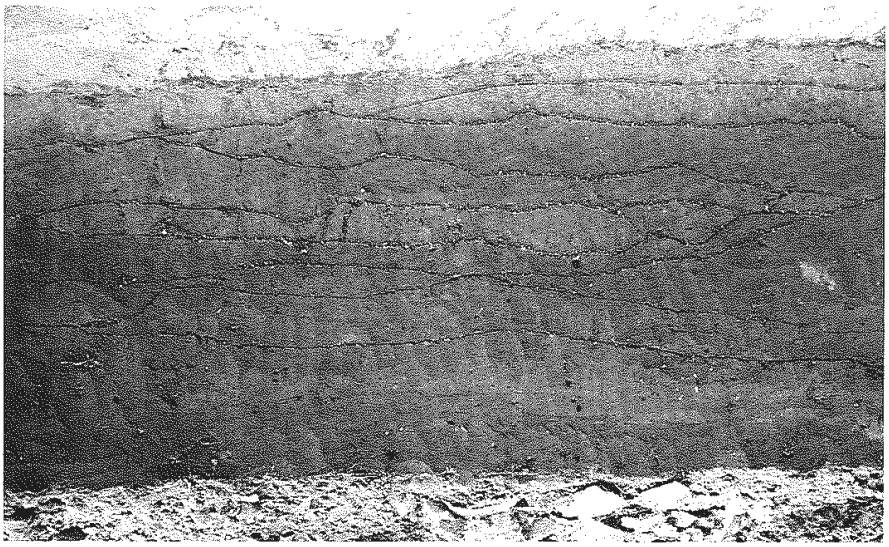


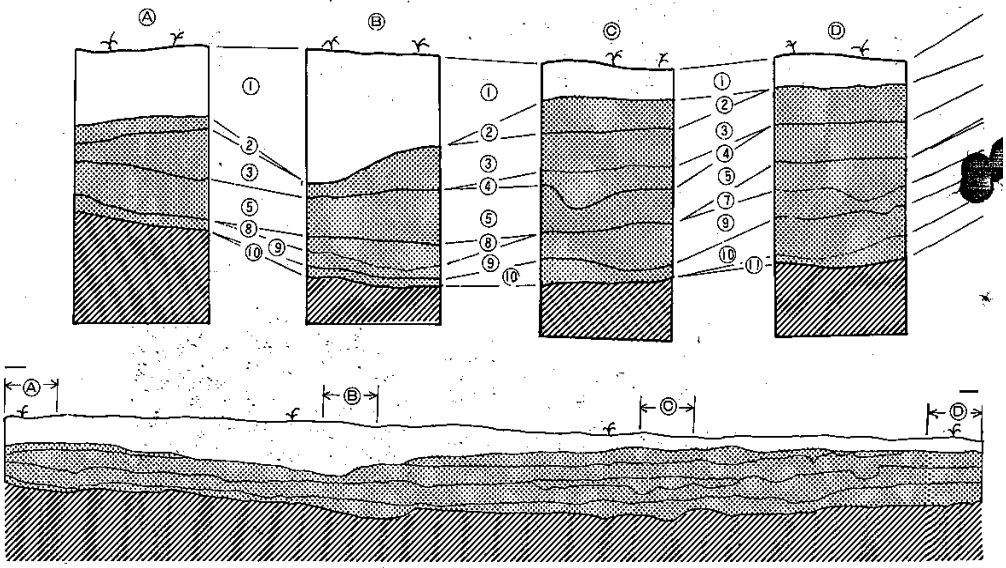
写真25

BK～BO・60区

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(10 YR 3/4)	砂質シルト	粘性無，焼土・炭化物の混入有
第2層	2	黒褐色(10 YR 2/2)	砂質シルト	粘性若干有,焼土・炭化物・地山の土粒の混入有
第3層	3	暗褐色(10 YR 3/4)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	4	暗褐色(7.5YR 3/3)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	5	黒褐色(10 YR 2/3)	砂質シルト	粘性有,焼土・炭化物・地山の土粒の混入有
	6	黒褐色(10 YR 3/2)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
第4層	7	暗褐色(10 YR 3/3)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	8	暗褐色(10 YR 3/3)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	9	暗褐色(10 YR 3/4)	粘土質砂	粘性有，焼土・炭化物の混入有
第5層	10	褐色(10 YR 4/4)	粘土質砂	粘性有，炭化物の混入有
	11	褐色(10 YR 4/6)	粘土質砂	粘性有，炭化物の混入有

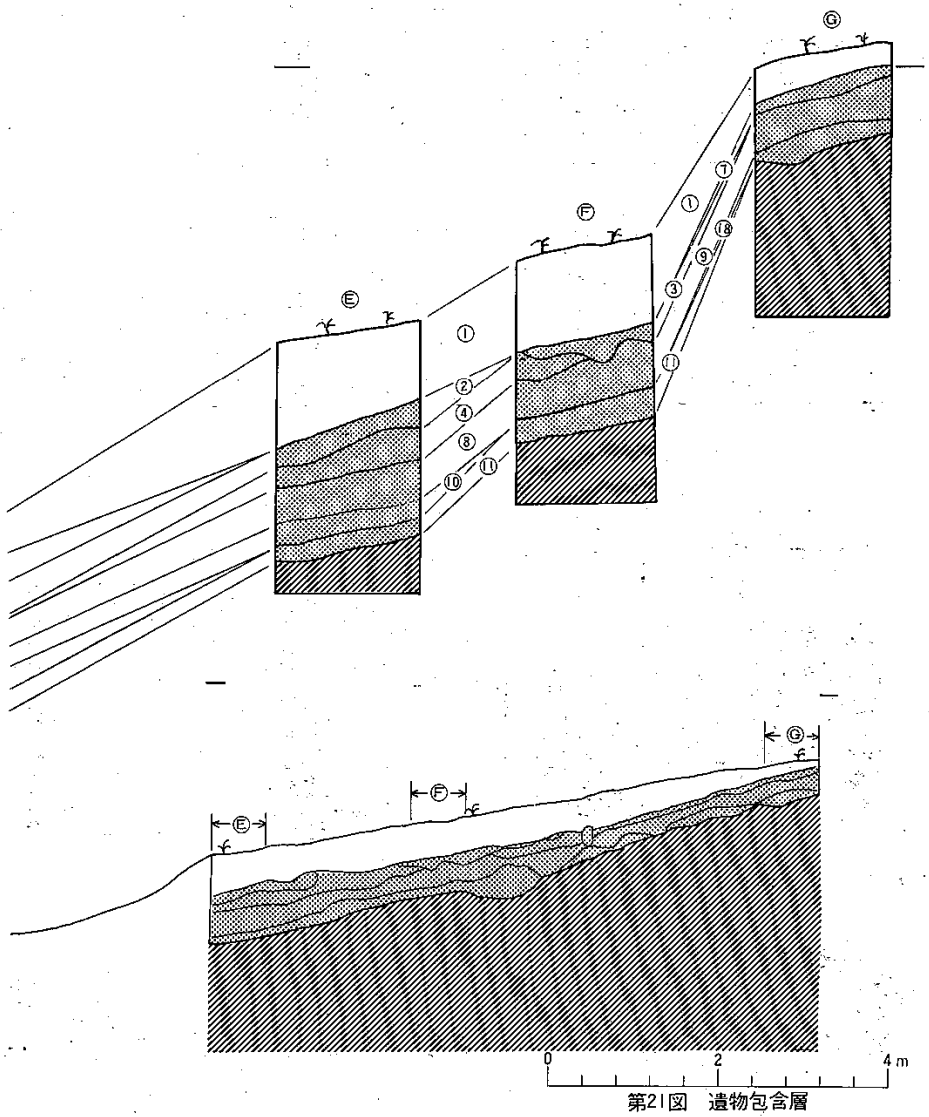
BG～BI・60区

層位	層No.	土色	土性	備考
第1層	1	暗褐色(10 YR 3/4)	砂質シルト	粘性無，パミス・炭化物の混入有
第2層	2	黒褐色(10 YR 3/2)	砂質シルト	粘性若干有
	3	黒褐色(10 YR 2/3)	砂質シルト	粘性無，焼土・炭化物の混入有
	4	暗褐色(7.5YR 3/3)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	5	極暗褐色(7.5YR 2/3)	砂質シルト	粘性無，焼土・炭化物の混入有(攪乱)



BG～BI・60区（前ページからの続き）

第２層	6	暗褐色(10 YR 3/3)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	7	暗褐色(10 YR ?)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
第３層	8	暗褐色(7.5YR 3/3)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	9	暗褐色(7.5YR 3/4)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	10	暗褐色(7.5YR 3/4)	砂質シルト	粘性有，焼土・炭化物の混入有
第４層	11	褐　色(7.5YR 4/4)	粘土質砂	粘性有，焼土・炭化物の混入有
	12～16	褐　色(10YR3/4・4/4 7.5YR4/4・4/4)	粘土質砂	粘性有，炭化物の混入有，ブロック状の堆積
	17	褐　色(7.5YR 4/4)	粘土質砂	粘性有・炭化物の混入有
	18	褐　色(7.5YR 4/6)	粘土質砂	粘性有，炭化物の混入有



第21図　遺物包含層

Ⅵ　調査成果の問題点

1．住居（跡）の構造

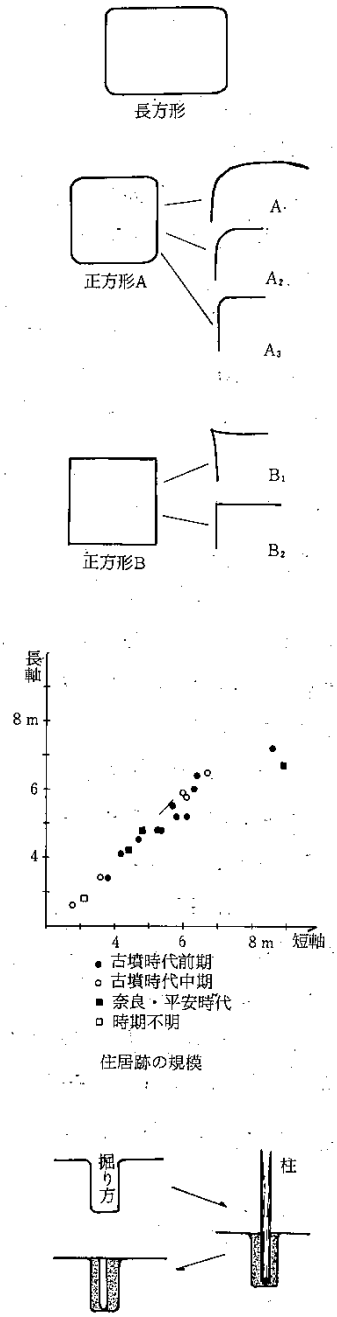
今回の調査で，合計56軒の住居跡が発見されている。これらは，いずれも竪穴住居跡で，地表を掘りくぼめて床としその中に柱を建て屋根をふいたものである。

平面形：正方形に近いものと，長方形のものとに大別することができる。正方形に近いものは，四隅の形態からA：丸味を帯びているもの，B：角ばっているものの2つに分類できる。Aタイプは，さらにA_1：住居の辺が外側に緩く弓状に張り出し，四隅が丸味をもつもの，A_2四隅が比較的大きく丸味をもつもの，A_3：四隅がやや丸味をもつものとに細分できる。また，Bタイプのものも、B_1：住居の四隅が張り出し角ばっているもの、B_2：四隅がきちんと角ばっているものに細分できる。A_2，A_3タイプのものが最も多く、B_2タイプがこれに次ぎ，A_1・B_1タイプの住居は少ない。

規模：第48住居跡のように，2.80×2.60mの小さな住居から，8.90×6.70mの規模をもつ第20住居跡のようなものまで，様々の大きさの住居がある。規模の点で，類型的なまとまりを示すものはない。小規模なものから大規模なものまで，ほぼ均質な分布を示す。この中で，古墳時代前期の第26住居跡と奈良・平安時代の第20住居跡は長軸が8m以上で例外的なものである。

床面：平坦にして床面を構築している。床面は住居掘り方底面に粘土を貼って固め，貼床にしている。貼床は住居全体におよぶものや部分的に認められるものとがある。また，貼った粘土の厚さも住居によって違いがみられる。

柱穴：柱穴は住居の上部構造を支える柱をたてる穴である。したがって，柱穴は掘り方（柱をたてるための穴）と柱痕跡から構成される。両者は柱のまわりに詰め込まれた土と柱が腐った後で入り込んだ土とによって区別される。柱穴の掘り方は大部分が円形であるが，中には長方形のものもある。柱痕跡の大きさから，柱の太さも推定することができる。柱穴は正方形に4個配置されている住居跡が多い。4本柱に梁と桁をわたし，垂木をかけた上屋構



第22図　模式図Ⅰ

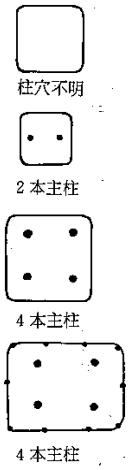
造が想定される。この他，第8住居跡のように，長軸線上に柱穴が2個ならぶ例もある。また，第21住居跡のように，住居内外から柱穴が検出されていない住居もある。

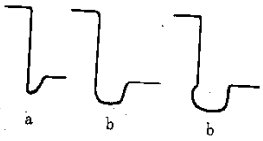
周溝：第13住居跡のように，周溝がない住居跡もあるが，大部分の住居には周溝が掘られている。周溝が壁に沿ってまわる住居もⅠ：壁沿いに周溝が1本まわる住居，Ⅱ：壁沿いに周溝が2本まわる住居の2つに大別できる。さらに，周溝の幅や断面形からａ：幅が狭く，断面形がV字形の周溝，ｂ：幅が広く，断面形がU字形の周溝とに分けられる。2つの要素の組み合わせから，宮前遺跡の住居の周溝は，Ⅰ－ａ型，Ⅰ－ｂ型，Ⅱ－ａ.ｂ型（壁沿いの周溝はａで内側の周溝がｂのもの），Ⅱ－ｂ・ｂ型（2本の周溝ともｂのもの）とに分類できる。Ⅰ－ｂ型のものが大部分で，Ⅱ-ｂ・ｂ型が次に多く，Ⅰ－ａ，Ⅱ－ａ・ｂ型は少ない。また第45住居跡のようにⅡ－ａ.ｂ型の周溝から地形の傾斜に沿って住居外に延びているものあり，周溝の機能を考える上で興味深い問題を提起している。また，壁沿いの周溝に接続して、柱穴を結んだ線上の中央まで直角に延びている溝をもつものもある。この溝の性格については，今後さらに検討を必要とする。

炉およびカマド：床面上で直接火を焚いた炉，燃焼部と煙道部を有するカマド，あるいは壁際の床面が焼けていて，上部構造の痕跡がわずかに残っているもの等がある。別項で詳述する。

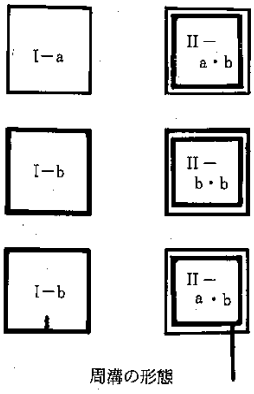
貯蔵穴：貯蔵用のための土拡であるという確証はない。床面上から検出された他のピットより規模も大きく，形も整っており，四隅のいずれかに1個構築されているものを貯蔵穴と仮称した。

その他の施設：第45住居跡の床面上には，性格不明の土壇がある。第25住居跡の床面上からは石製模造品の素材・砥石・磨石等が発見され，性格不明のピットが検出された。工房跡の可能性も考えられるが断定できない。





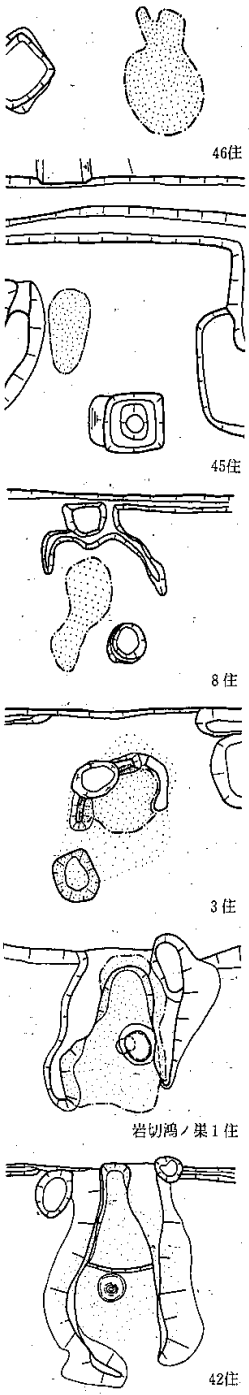
周溝の断面形態



周溝の形態

第23図　模式図2

2．炉およびカマド



第24図　炉およびカマド

今回調査された竪穴住居跡には一部を除いてほとんどのものに炉もしくはカマドがみられる。炉やカマドの構造・構築方法等について現段階での検討を加えておきたい。

炉

宮前遺跡にみられる炉の特徴は次のようにまとめることができる。

1．他の空間から区画するための特別な施設（粘土や石積み等）をもたない。2．床面が一定範囲焼けて赤褐色に変色し，硬くなっている。3．熱による影響（色調変化・硬化）は周辺部に向うに従って弱まっている。このように，特別な施設をともなわないが，常に火が焚かれていた「場」であることは疑う余地がない。なお，炉の位置は住居の中央から僅かに偏った部分のものが多い。

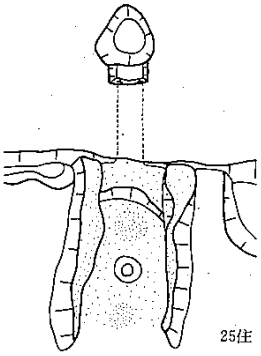
カマド

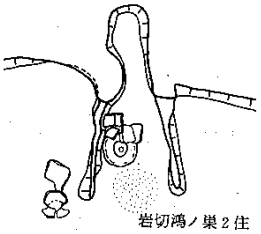
基本的な構造：カマドは焚き口部・燃焼部・煙道部・煙り出し部から構成されている。燃焼部や煙道部には側壁の上に天井部がつく。燃焼部の天井には甕を受ける穴がある。宮前遺跡から発見されたカマドは燃焼部の天井が崩れてしまっているので，「受け穴」の実態については明らかにすることができなかった。

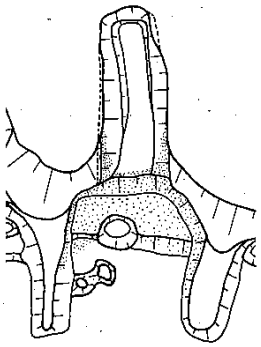
構築の方法：今回発見されたものはすべて竪穴住居の壁ぎわにつくりつけられている。その構築方法を検討すると三つの方式が認められる。1．すべて粘土の積みあげによってつくっているもの。2．住居外の地山を掘り抜いてつくっているもの（掘り抜き式構築）。3．両者を併用しているもの（粘土構築＋掘り抜き式構築）。

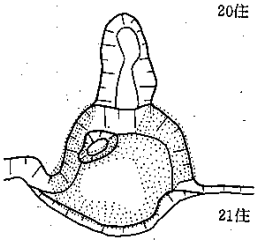
使用状況の観察：カマドには構造上のちがいが幾つか認められるが，使用の痕跡を観察すると一致する点が多い。すなわち，直接強い火熱を受けて赤褐色に変色して硬くなっているのは燃焼部であり，それは特に側壁の上部に著しい。焚き口部分は火熱の影響がほとんど認められない。煙道部は火熱の影響が微弱なものが多く，痕跡の判明しないものもある。焼け方は黒ずんだ暗赤褐色である。

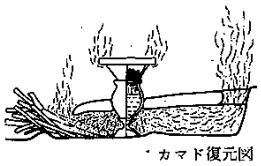
カマドの分類：宮前遺跡から発見されたカマドを構築方法や形態的な特徴から分類すると次のようになる。











第25図　炉およびカマド2

Aタイプ：粘土を積みあげてカマドの上部構造（側壁と天井）をつくっているもの（第42住居跡）。形態的特徴として次の点をあげることができる。1. 焚き口から煙り出し部まですべて住居内にあり，住居の外には延びていない。2. 燃焼部側壁の立ちあがり角度がゆるやかで（側壁内面 45°内外），上部構造が低い。3. 燃焼部から煙道部にかけて幅がゆるやかにせばまっている。4. 燃焼部底面には坏および高坏を転用した支脚が設置されている。

Bタイプ：焚き口部と燃焼部を粘土の積みあげ，煙道部の大部分と煙り出し部分を掘り抜きによってつくっているもの。形態的特徴として次の点をあげることができる。1. 燃焼部は住居内にあるが，煙道部は住居外に延びている。2. 燃焼部と煙道部の幅に画然としたちがいがある。燃焼部側壁の立ちあがり角度が急で（内面 90°内外）上部構造が高い，このBタイプのカマドは煙道部の状態によってさらに2種にわかれる。B①タイプ：煙道部の一部が未だ住居内に残るもの（第25住居跡）。燃焼部底面には甕を転用した支脚が設置されている。B②タイプ：煙道部がすべて住居外にあるもの（第20住居跡・第54住居跡）。

Cタイプ：カマド全体が掘り抜き式のもの（第 21 住居跡）。形態的特徴として，燃焼部と煙道部が住居外にはり出している。

特異な形態の炉

既に述べた炉の他に，特異な形態をした炉がある。形態的にはいずれも異なるが，位置的に竪穴住居の壁に極めて接近しているという点で共通し，次のようなものがある。1：壁に近い床面が焼けている。壁との間に周溝がある。上部構造の存在を示す痕跡はない（第45住居跡）。2：壁に沿った周溝の一部がふくらんでその内面が焼けている。（第43住居跡）。3. 壁に近い床面が焼けており，その三方を細い溝が囲んでいる（第48住居跡）。4. 壁に近い床面が焼けておりその周りに堤状の高まり（側壁）がある（第3住居跡）。これらの炉の中には側壁の認められるものがあり，他の炉に較べ燃焼効果という点で，すぐれた機能をもっていると考えられる。しかし天井部の存在を推定し得るものはなく，カマドとは異なるものと考えられる。

3．宮前遺跡の歴史的構成

今回の調査によって弥生時代，古墳時代前期，古墳時代中期，奈良・平安時代の遺物が多量に出土した。その結果，宮前遺跡が非常に長い期間にわたって形成されたことが明らかとなった。この中で，住居跡等の遺構が発見されたのは古墳時代と奈良・平安時代に属するものである。焼土遺構等のように時代不明のものもあるが，明確に弥生時代に属するものはない。

弥生時代

弥生時代の土器として桝形囲式，桜井式や天王山式の土器が出土している。この他，石包丁アメリカ式石鏃等弥生時代特有の石器が出土している。このような弥生時代の遺物は表土や遺物包含層からの出土が多いが，古墳時代や奈良・平安時代の住居跡の堆積土中にも入り込んでいる。遺物の量は他の時代のものと較べるとあまり多くない。しかし、当時の人々が宮前遺跡において生活を営なんでいた可能性は否定できない。居住の場が今回の調査範囲外にあったのかそれとも古墳時代や奈良・平安時代の段階で壊されてしまったのかは明らかでない。

古墳時代前期

古墳時代前期の土器として塩釜式の土師器が多量に出土している。高坏・坏・器台・壺・甕・台付甕・甑等の器種がある。複合口縁の壺に棒状の縦位浮文のつけられたものが2点出土している。宮城県では最初の発見例である。この他小形手捏ね土器等がある。石器としては磨面の非常に広い砥石が出土している。鉄製品は腐蝕しやすいためか発見されなかったが，鉄製農具の存在が推定される。

住居（跡）の構造：古墳時代前期と推定される住居跡は 23 軒確認されている。この時期の住居跡はいずれも平面形が隅丸方形（正方形・長方形）のもので占められる。平面形Aタイプとして分類したものである。規模は小さいものから大きいものまで均質な分布を示している。主柱穴は正方形に4個ならんでいるものが多い。周溝には，Ⅰ－b型，Ⅱ－b型等があるが一部に検出されなかったものもある。住居の軸線上にみられる溝はこの時期に特徴的である。炉は住居の中央から僅かに偏った部分に設けられている。しかし，一部に炉が検出されなかった住居があり，それがどのような意味をもつのか今後検討しなければならない。この他，住居に伴なう施設として貯蔵穴と仮称したピットを備えているものがある。

住居群の分布：23軒の住居跡について，その分布をみると，いずれも丘陵の平担面上に立地していて，谷に面した南斜面には認められない。その中で最も集中しているのは調査区の東側で，幾分くぼんでいる部分である。しかし，同一地点に数軒の竪穴住居が重なりあって発見されていることからこれらの住居群が同時に存在していたと考えることはできない。住居が使われなくなって埋まった後，同じ場所に別の竪穴住居がつくられ，それが幾度となく繰りかえさ

れたことがわかる。同じ型式の土器が使用されている期間というものが決して短いものでないことを示している。

古墳時代中期

古墳時代中期の遺物として南小泉式の土師器（高坏・坏・壺・甕・甑）のほかに砥石・敲石・石製模造品（有孔円板・勾玉・臼玉・素材）などが出土している。

住居（跡）の構造：古墳時代中期と指定される住居跡は8軒確認されている。この時期の住居跡はほとんどが平面形Ｂタイプとした方形のものによって占められる。柱穴の配置は前期に較べ変化がない。周溝はＩ型が増加し，Ⅱ型が減少する傾向にある。また，明瞭なａ型が出現する。住居の軸線上の溝はほとんど見られなくなる。貯蔵穴と仮称したピットはさらに普及する。

古墳時代中期の住居の重要な特徴はカマドの設置されたものが出現することである。炉は１例のみで，他に特異な形態の炉として分類されたものがある。今回の調査で確認されたカマドはＡタイプおよびB_1タイプとして分類されたものである。

カマド出現の意義：古代のカマドは関西に移動式のものもあるが，一般的には住居をつくった段階でつくりつけたものが多い。つくりつけのカマドの出現は関東地方や東北地方の南半では古墳時代中期（和泉式期，南小泉式期）であることが最近明らかになってきた（和島・金井塚：1966・佐々木：1974，宮城県教委：1974）。カマドの出現は火熱をどれだけ効果的に無駄なく利用するかという点で古代の生活史上画期的な変化であり，その意義は大きい。

住居群の分布：この時期に属する住居群の分布は非常に特徴的である。前期の住居群のように１ヶ所に集中することがなく，南側の谷を囲むような形で丘陵の平坦面に分布している。

奈良・平安時代

奈良・平安時代に属する土師器（国分寺下層式・表杉ノ入式）と須恵器（坏・壺・甕）が出土している。この他，大型の管状土錘・土製支脚等も出土している。

住居跡は7軒発見されているが重複していて保存のよくないものが多い。平面形・柱穴配置等は古墳時代中期のものと大きなちがいはない。周溝はａ型が一切姿を消し，Ｉ－ｂ型のみとなる。カマドはB_2型やｃ型のものが設置されている。

住居群は南側に傾斜している部分に分布しており丘陵の平坦面にはみられない。この点，古墳時代前期や中期の住居群は立地の上で大きな相違がみられる。

南側の谷の中央部に形成されている遺物包含層はほとんどがこの時期のものである。

Ⅶ　調査のまとめと今後の問題点

1．調査のまとめ

〔1〕宮前遺跡の所在する丘陵の約⅙を発掘し，古代（4 世紀～10 世紀）における住居や集落の構造を知るうえで極めて重要な成果が得られた。

〔2〕特に古墳時代前期～中期の集落の実体について不明なことが多かったので，この点宮城県の古代史を知る上で欠くことのできない貴重な資料が得られた。

〔3〕古代における住居の占地の仕方，配置関係に時期的な変化があること，住居の規模に大きいものと小さいものが併存していたことが明らかになり，当時の集落構造とその変遷，家族形態，労働編成のあり方などを解明する手がかりがつかめた。

〔4〕古墳時代中期になると炉にかわってカマドの設置された住居が出現することが明らかになった。カマドの基本構造，構築の技術，成立の技術的背景，消費生活における機能的役割，出現の意義等を知る上で欠かせない資料となるであろう。

2．今後の問題点

宮前遺跡は当初予想したよりもはるかに大規模な集落跡である。そして，住居跡の分布は調査区のさらに北側と東側にのびていることも確認された。また，谷の部分には遺物包含層の厚い堆積が認められ，その大半は未調査のまま残されている。調査を実施した部分は宅地造成のため失われてしまうが，未調査の区域に対して，今後計画的な保存対策を整える必要がある。また，宮前遺跡のような集落跡は突然出現したわけでなく，亘理地域の縄文時代や弥生時代以来の歴史のつみ重ねの上に成立したものと思われる。宮前遺跡と同じ丘陵上には長井戸古墳群があり，宮前遺跡の東方（浜吉田駅の北側）には古墳時代中期に築造された埴輪をめぐらした大塚古墳がある。また本遺跡周辺には縄文時代以来数多くの遺跡が営まれている。宮前遺跡はこのような遺跡群の中で正当に評価されるべきものであり，そのことによって県南浜通り亘理地域の歴史が少しずつではあるが明らかにされるであろう。

引用・参考文献（引用順）

田崎敬修（1971）：「沖積世における海面変化（高度・時期）について」『福島考古』№12

松本彦七郎（1930）：「陸前名取郡及磐城国亘理郡の石器時代後期乃至前後遺跡」『東北帝国大学理学部地質古生物邦文報告』第 9 号

志間泰治（1956）：「宮城県亘理郡における考古学上の遺跡」『宮城県の地理と歴史』1 輯

小山・竹原（1967）：『新版標準土色帖』

佐々木達夫（1974）：「古代村落の変遷過程」『原始古代社会研究』Ⅰ

宮城県教育委員会（1974）：「岩切鴻ノ巣遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第 35 集

第26図　宮前遺跡遺構配置図

宮前遺跡遺構集成表

住居跡番号	平面形	規模	長軸方向	重複・増改築	カマドおよび炉				主柱穴	貯蔵穴			周溝	備考
					位置	規模	分類			位置	規模	深さ		
1	正方形	5.2m×?	北西一南東 又は北東一南西	2・3住居跡より古い		不明			4個	南西隅	0.6m×0.7m	0.20m	I—b タイプ	古墳時代 (前期)
2	〃	4.7m×4.5m	北東一南西	1回の増築	炉	床面中央より 北寄り	0.7m×0.6m		4個	南西隅	0.5m×0.5m	0.37m	I—b タイプ	古墳時代 (前期)
3	〃	4.9m×?	北一南 又は東一西	1・2住居跡より新しい	炉	北壁寄り	0.4m×0.4m	特異な形態の炉	不明	不明			I—b タイプ	古墳時代 (中期)
4	不明	不明	不明	38住居跡と重複 新・旧不明	炉	不明	1.1m×0.4m 0.7m×0.4m 0.7m×0.3m		不明	不明	1.0m×0.6m(?)	0.45m	無し	古墳時代 (前期か中期)
5	長方形	6.1m×5.2m	北東一南西	38住居跡と重複 新・旧不明	炉	床面中央より 北寄り	0.8m×0.4m		4個	北東隅	0.7m×0.6m	0.32m	I—b タイプ	古墳時代 (前期)
6	方形	5.6m×?	北一南 又は東一西	7住居跡と重複 新・旧不明	炉	床面中央より 北寄り	0.7m×0.5m		4個(?)	南西隅	1.6m×0.6m	0.41m	I—b タイプ	古墳時代 (前期)
7	〃	6.4m×?	〃	6住居跡と重複 新・旧不明	炉	床面中央より 北東寄り	1.6m×0.7m		4個(?)	不明			I—b タイプ	古墳時代 (前期)
8	正方形	3.6m×3.4m	北東一南西	無し	炉	北壁寄り	0.7m×0.4m	特異な形態の炉	2個(?)	北東隅	0.8m×0.7m	0.28m	I—a タイプ	古墳時代 (中期)
10	〃	5.7m×5.5m	東一西	〃	炉	床面中央より 西寄り	0.3m×0.3m		4個	南東隅	0.5m×0.4m	0.38m	I—b タイプ	古墳時代 (前期)
11	方形	不明	北一南 又は東一西	〃		不明	0.2m×0.2m		不明	不明			I—b タイプ	古墳時代 (前期か中期)
13	正方形	6.3m×6.0m	北西一南東	〃		無し			4個	無し			無し	古墳時代 (前期)
14	〃	4.8m×4.8m	北一南	増築(?)	カマド	床面中央より 北寄り	1.0m×0.7m	形態不明 Bタイプの可能性あり	4個	〃			I—b タイプ	奈良・平安時代
15	方形	3.7m× ?	北一南 又は東一西	無し	炉	床面中央より 北寄り	0.6m×0.3m		4個	〃			I—b タイプ	古墳時代 (前期か中期)
16	〃	5.1m× ?	〃	〃	炉	床面中央より 北東寄り	0.7m×0.4m		4個	不明			I—b タイプ	古墳時代 (前期か中期)
18	方形	4.2m× ?	北一南 又は東一西	〃	炉	床面中央より 北寄り	0.7m×0.4m		4個	無し			I—a タイプ	古墳時代 (前期か中期)

住居跡番号	平面形	規模	長軸方向	重複・増改築	カマドおよび炉				主柱穴	貯蔵穴				周溝	備考
					位置	規模	分類			位置	規模		深さ		
20	長方形	8.9m×6.7m	北一南	2回の増築	カマド	北壁中央	1.3m×1.0m	B_2タイプ	4個(?)	無し				Ⅰ—bタイプ	奈良・平安時代
21	隅丸正方形	4.4m×4.2m	北一南	22・23住居跡より新しい	カマド	北壁中央より東寄り	0.8m×0.8m	Cタイプ	不明	〃				Ⅰ—bタイプ	奈良・平安時代
22	方形	不明	北一南又は東一西	21住居跡より古い		不明			不明	〃				無し	古墳時代(前期か中期)
23	〃	不明	〃	21住居跡より古い		不明			不明	〃				〃	古墳時代(前期か中期)
24	隅丸方形	不明	〃	27・28・29住居跡より古い		不明			4個(?)	南東隅	0.8m×0.5m		0.45m	Ⅰ—bタイプ	古墳時代(前期)
25	正方形	6.1m×5.8m	北東一南西	26・51住居跡より新しい	カマド	北壁中央	1.1m×0.8m	B_1タイプ	4個	南東隅	1.4m×0.8m		0.34m	Ⅰ—aタイプ	古墳時代(中期)
26	長方形	8.6m×7.2m	北西一南東	26住居跡より古く51住居跡より新しい	炉	北東隅	1.2m×0.6m		不明	不明				Ⅰ—bタイプ	古墳時代(前期)
27	隅丸長方形	5.8m×5.2m	北一南又は東一西	29・52・53住居跡より新しい	炉	床面中央	0.5m×0.4m		4個	南東隅	0.9m×0.9m		0.48m	無し	古墳時代(前期)
28	正方形	6.4m×6.4m	北一南又は東一西	24・29・52住居跡より新しい	炉	床面中央より南東寄り	0.7m×0.5m		4個	南東隅	0.8m×0.5m		0.64m	Ⅱ-a・bタイプ	古墳時代(前期)
29	方形	不明	北一南又は東一西	27・28住居跡よく古く52・53住居跡より新しい		不明			不明	不明				Ⅰ—bタイプ	古墳時代(前期)
30	方形	(改築前)6.5m×?(改築後)4.4m×?	北一南又は東一西	改築1回	炉	床面中央より北寄り	1.0m×0.4m 0.7m×0.4m		4個(?)	南東隅	0.9m×0.8m		0.38m	Ⅱ-b・bタイプ	古墳時代(中期)
31	方形	不明	北一南又は東一西	無し		不明			無し	不明	0.5m×0.5m(?)		0.20m	Ⅰ—bタイプ	古墳時代(前期か中期)
32	方形	4.1m×?	北一南又は東一西	〃		不明			4個(?)	南東隅	0.6m×0.4m		0.25m	Ⅰ—bタイプ	古墳時代(前期)
34	正方形	3.1m×2.8m	北東一南西	〃	炉	床面中央	1.1m×0.8m		不明	無し				Ⅰ—bタイプ	古墳時代(前期か中期)
35	方形	不明	北西一南東又は北東一南西	37住居跡と重複新旧不明		不明			4個(?)	不明				無し	古墳時代(前期か中期)

37	正方形	4.2m×4.1m	北西－南東	35住居跡と重複 新旧不明	炉	床面中央より 若干北寄り	0.3m×0.1m		4 個	南東隅	0.8m×0.6m	0.29m	Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (前期か中期)
38	正方形	3.8m×3.4m	北－南	4・5住居跡と重複 新旧不明	炉	床面中央より 若干南西寄り	0.6m×0.5m 0.6m×0.4m		不明	南東隅	0.7m×0.5m	0.22m	Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (前期)
39	方形	不明	北西－南東 又は北東－南西	無し		不明			不明	不明	0.5m×0.4m	0.38m	無し	古墳時代 (前期)
40	方形	5.3m×？	北－南 又は東－西	41住居跡の改築後の住居跡	炉	床面中央より 北寄り	1.4m×0.6m		4 個	南東隅	0.9m×0.7m	0.39m	Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (前期)
41	方形	3.9m×？	北－南 又は東－西	40住居跡の改築前の住居跡	炉	床面中央より 若干北寄り	0.4m×0.2m		4 個	南東隅	0.7m×0.5m	0.12m	Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (前期)
42	正方形	6.0m×5.9m	北－南	無し	カマド	東壁中央より 若干南寄り	1.4m×1.1m	Aタイプ	4 個	南東隅	1.0m×0.9m	0.30m	Ⅰ－a タイプ	古墳時代 (中期)
43	正方形	2.8m×2.6m	北－南	〃	炉	東壁中央より 南寄り	0.8m×0.6m	特異な形態の炉	不明	無し			Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (中期)
44	方形	3.7m×？	北－南 又は東－西	〃		不明			無し	不明			無し	古墳時代 (前期か中期)
45	正方形	6.7m×6.5m	北－南	〃	炉	東壁中央より 南寄り	0.5m×0.3m	特異な形態の炉	4 個	南東隅	0.7m×0.7m	0.4 m	Ⅱ-a·bタイプ	古墳時代 (中期)
46	長方形	5.4m×4.8m	北西－南東	47住居跡より新しい	炉	床面中央より 北西寄り	0.8m×0.5m		4 個	無し			Ⅱ-b·bタイプ	古墳時代 (前期)
47	正方形	3.5m×？	北東－南西 又は北西－南東	46住居跡より古い	炉	床面中央より 南西寄り	0.7m×0.2m		4 個(?)	不明			Ⅰ－a タイプ	古墳時代 (前期)
48	方形	(改築前) 4.7m×？ (改築後) 5.2m×？	北－南 又は東－西	1回の改築		不明			(改築前) 4 個 (改築後) 4 個	南東隅	(改築前) 0.6m×0.5m (改築後) 0.8m×0.6m	0.16m 0.38m	(改築前) Ⅰ－a タイプ (改築後) Ⅱ-a·bタイプ	古墳時代 (中期)
49	方形	5.9m×？	北東－南西 又は北西－南東	50住居跡より新しい		不明			不明	不明			Ⅱ-b·bタイプ	古墳時代 (前期)
50	方形	4.3m×？	北－南 又は東－西	49住居跡より古い		不明			4 個	不明			無し	古墳時代 (前期)
51	長方形	5.3m×4.8m	北東－南西	25・26住居跡より古い	炉	床面中央より 北寄り	0.9m×0.4m		4 個(?)	不明			Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (前期)
52	不明	不明	不明	53住居跡より新しく27・28・29住居跡より古い		不明			不明	不明			Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (前期)
53	方形	4.5m×？	北－南 又は東－西	27・28・29住居跡より古い		不明			不明	南東隅	0.8m×？	0.29m	Ⅰ－bタイプ	古墳時代 (前期)

住居跡番号	平面図	規模	長軸方向	重復・増改築	カマドおよび炉				主柱穴	貯蔵穴			周溝	備考
					位置	規模	分類			位置	規模	深さ		
54	正方形	3.6m×？	北ー南 又は東ー西	55・56住居跡より新しい	カマド	東壁中央より南寄り	(燃焼部) 1.0m×0.8m (煙道部) 1.1m×0.3m	B_2タイプ	不明	南東隅	1.0m×0.6m	0.20m	Ⅰ－b タイプ	奈良・平安時代
55	方形	不明	北東ー南西 又は北西ー南東	54住居跡より古く 56住居跡より新しい		不明			不明	不明			Ⅰ－b タイプ	奈良・平安時代
56	方形	2.7m×？	北東ー南西 又は北西ー南東	54・55住居跡より古い		不明			不明	不明			無し	奈良・平安時代
57	方形	5.5m×？	北東ー南西 又は北西ー南東	1回の増築 58住居跡より古い		不明			不明	不明			Ⅰ－b タイプ	奈良・平安時代
58	方形	3.8m×？	北東ー南西 又は北西ー南東	57住居跡より新しい		不明			不明	北東隅	0.9m×0.6m	1.2m	Ⅰ－b タイプ	奈良・平安時代
59	方形	不明	北東ー南西 又は北西ー南東	無し		不明			無し	無し			Ⅰ－b タイプ	古墳時代 (前期)

焼土遺構番号	平面図	規模	残存する深さ	長軸方向	重復関係	その他	土坑番号	平面形	規模	残存する深さ	長軸方向	重復関係	その他
1	長方形	1.1m×0.7m	0.16m	北東ー南西	38住居跡より新しい	側壁と底面の一部が焼けている	1	隅丸長方形	0.7m×0.6m	0.08m	北ー南	無し	
2	長楕円形	1.4m×0.9m	0.28m	北西ー南東	無し	側壁が若干焼けている	2	長楕円形	1.4m×0.9m	0.69m	北ー南	45住居跡より古い	
3	隅丸長方形	1.2m×0.8m	0.06m	北東ー南西	〃	側壁が若干焼けている	3	長楕円形	1.3m×0.8m	0.73m	北ー南	無し	底部両端にピット有り
4	隅丸長方形	0.8m×0.5m	0.22m	北ー南	〃	側壁が火熱の為焼けている	4	楕円形	0.9m×0.7m	0.30m	東ー西	40住居跡より新しい	堆積土から高坏 坏部出土
5	長方形	0.9m×0.6m	0.14m	北ー南	〃	側壁が火熱の為焼けている	5	隅丸正方形	0.8m×0.8m	0.33m	東ー西	無し	堆積土から高坏 坏部が出土
6	不明	0.9m×0.5m	0	東ー西	〃	削平の為側壁残存せず	6	隅丸正方形	1.0m×0.6m	0.28m	北ー西	無し	
7	不明	0.7m×0.5m	0	東ー西	〃	削平の為側壁残存せず							
8	長方形	1.1m×0.6m	0.21m	北東ー南西	〃	側壁と底面の一部が焼けている							

昭和49年度文化財保護課職員

			調査第一係					
課長		西川　十郎	技術主査兼係長	氏家　和典	調査第二係	係長	斎藤　良治
副参事		村上　　正	技術主査	早坂　春一		技術主査	佐々木茂禎
課長補佐		大石　正巳	〃　〃	平沢英二郎		技術	加藤　道男
総務係	係長	桜井　雄二	技術	白鳥　良一		〃	丹羽　　茂
	主事	佐藤　博重	〃	鈴木惣之助		〃	斎藤　吉弘
	〃	小笠原　任	〃	小井川和夫		〃	宮崎　敬典
管理係	係長	扇　　正人	〃	高橋　守克		〃	佐藤　好一
	主事	佐藤はちえ	嘱託	恵美　昌之		嘱託	柳田　俊雄
	〃	渡辺　和彦	〃	熊谷　幹男		〃	田中　則和
保護協会	書記	蜂谷マサ子	〃	阿部　　恵		〃	真山　　悟
			〃	中島　　直		〃	芳賀　寿幸
			〃	清野俊太郎		〃	阿部　博志
			〃	後藤　幸雄		〃	森　　貢喜
			〃	林　　和男		〃	手塚　　均
			補助員	山崎くみ子		〃	青沼　一民
				菊地　恵子		補助員	伊藤　玲子
						〃	伊藤　康子
						〃	菅原　正年